

## 第6章 特論

### 第1節 豎穴住居3出土須恵器杯身赤色部の顔料分析

藤根 久(パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

名和飛田遺跡の調査では、外面に赤色塗彩されたような痕跡を示す須恵器杯身(掲載遺物番号: 156)が出土した。ここでは、この赤色部の成分を調べるためにX線分析顕微鏡を用いた元素マッピング分析およびポイント分析を行った。

#### 2. 試料と方法

試料は、予めマイクロスコープを用いて写真撮影した(特論図版1)。

試料は、赤色痕跡が認められる部分41.984mm四方について元素マッピングを行った(特論図版2)。また、赤色部分4箇所と胎土1箇所についてポイント分析を行った。

測定は、(株)堀場製作所製XGT-5000Typeを用いた。元素マッピング分析は、X線導管径100 $\mu$ m、電圧50KV、測定時間は9,146秒である。

ポイント測定は、X線導管径100 $\mu$ m、電圧50KV、電流自動設定、測定時間500secである。定量計算は、標準試料を用いないFP法(ファンダメンタルパラメータ法)で半定量分析を行った。

#### 3. 結果および考察

元素マッピング分析を行った結果、赤色部分に対応して鉄や水銀などの輝度の高いマッピング像は得られなかった。

一方、主たる赤色部と胎土におけるポイント分析では、赤色部の鉄含有量( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )が3.64~6.55%であり、胎土の鉄含有量が4.05%であった。なお、赤味が最も強い部分はポイントBであるが鉄含有量( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )は6.55%と最も高い(特論図版2、表14)。ただし、赤色部におけるポイント分析においてすべてで鉄含有量が高い訳ではない。なお、その他赤色顔料に利用される水銀Hgあるいは鉛Pbなどの元素は検出されなかった。

以上のことから、元素マッピング分析では顕著に検出されなかった。なお、試料測定面は、大型試料であり測定に適した水平ではなくやや傾いた状態でセットしたため、口縁側に向かって強度がやや低い。このことが顔料に起因する元素の輝度が高くでない原因であることも考えられる。

胎土と比較して1~2%程度高いことから、使用した装置で検出できる限界以下であったことが考えられる。ただし、肉眼的に最も赤味の強い赤色部において鉄含有量が2%程度高いことから、この赤色部が鉄に起因するものと考えられる。

表14 蛍光X線分析によるポイント分析結果

No.	位置	MgO (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	SiO <sub>2</sub> (%)	SO <sub>3</sub> (%)	K <sub>2</sub> O (%)	CaO (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	MnO (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	ZnO (%)	Rb <sub>2</sub> O (%)	SrO (%)	Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	ZrO <sub>2</sub> (%)	合計
A	赤色部	0.58	17.95	70.57	1.60	3.18	1.09	1.18	0.02	0.11	3.65	0.01	0.01	0.02	0.00	0.03	100.00
B		0.77	13.77	70.08	0.40	4.37	1.58	2.05	0.04	0.15	6.55	0.03	0.02	0.06	0.01	0.11	99.99
C		0.14	14.22	74.09	0.52	2.78	1.20	1.54	0.03	0.11	5.26	0.01	0.01	0.03	0.01	0.04	100.00
D	胎土表面	1.09	18.89	72.11	0.26	1.92	0.87	1.09	0.01	0.07	3.64	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02	100.01
E		0.71	13.80	74.21	0.37	2.91	2.05	1.67	0.01	0.12	4.05	0.01	0.01	0.04	0.01	0.05	100.02
最大値		0.14	13.77	70.08	0.26	1.92	0.87	1.09	0.01	0.07	3.64	0.01	0.01	0.01	0.00	0.02	
最小値		1.09	18.89	74.21	1.60	4.37	2.05	2.05	0.04	0.15	6.55	0.03	0.02	0.06	0.01	0.11	

## 第2節 名和飛田遺跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

名和飛田遺跡では、縄文時代早期から晩期にかけての土器・石器、弥生時代中期の竪穴住居跡や絵画土器、古墳時代後期末の竪穴住居跡や掘立柱建物跡等の遺構・遺物が検出されている。このうち、古墳時代後期の竪穴2は焼失住居跡であり、住居構築材の一部と考えられる炭化材が出土している。

本報告では、竪穴2における住居構築材の木材利用を明らかにするために、出土した炭化材の樹種同定を実施する。

### 1. 試料

試料は、竪穴2から出土した炭化材5点（試料 1～5）である。

### 2. 分析方法

木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

### 3. 結果

炭化材は、いずれも小片であり、保存状態も悪かった。そのため、試料 1は、実体顕微鏡による観察で広葉樹であることは確認できたが、電子顕微鏡による観察が不可能であり、種類の同定には至らなかった。その他の4点は、いずれも広葉樹で3種類

樹種同定結果

遺構	時 期	試料	樹 種
竪穴2	古墳時代後期	1	広葉樹
		2	ケヤキ
		3	ヌルデ近似種
		4	コナラ属アカガシ亜属
		5	ヌルデ近似種

（コナラ属アカガシ亜属・ケヤキ・ヌルデ近似種）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

#### ・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*） ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、1 - 2個幅で単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 - 15細胞高のものと合放射組織とがある。

#### ・ケヤキ（*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino） ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性1 - 8細胞幅、1 - 50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

#### ・ヌルデ近似種（cf. *Rhus javanica* L.） ウルシ科ウルシ属

試料はいずれも若年部分で、年輪界を欠く。早材部と晩材部とで道管径が大きく異なることから環孔材と判断される。孔圏部は6 - 7列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減し、

2 - 3個が複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1 - 5細胞幅、1 - 40細胞高。

若年部分であること、年輪界を欠くことなどから同定する上で重要な道管配列の特徴が把握できない。また、保存状態も悪く、小道管のらせん肥厚の有無等が観察できなかった。これらのことから、近似種とした。

#### 4. 考察

竪穴2は床面が長方形を呈すると考えられるが、1/3が調査区外で確認されていない。炭化材は、住居の南東壁中央部付近の床面から3点(試料 1、2、3)住居南西壁の中央やや北寄の床面から2点(試料 4、5)がそれぞれ出土している。樹種は、南東壁の炭化材が種類不明の広葉樹、ケヤキ、ヌルデ近似種、南西壁の2点アカガシ亜属とヌルデ近似種であった。この結果から、竪穴2では少なくとも3種類の木材が使用されていたことが推定される。

アカガシ亜属とケヤキは、重硬で強度が高く、ケヤキでは耐朽性も比較的高い(平井1979、1980)。一方、ヌルデは、広葉樹としては軽軟な部類に入るが、耐朽性が高いとされる(平井1981)。アカガシ亜属は、暖温帯常緑広葉樹林を構成する常緑広葉樹、ケヤキとヌルデは二次林等の落葉広葉樹林に生育する落葉広葉樹であり、とくにヌルデは林縁部等の陽地を好む。これらの材質を考慮すれば、アカガシ亜属とケヤキは強度を利用して主要な部位に利用したことが推定される。一方、ヌルデは耐朽性を利用したと考えられるが、軽軟であることからアカガシ亜属やケヤキとは異なる部位に使用された可能性がある。

本遺跡周辺地域では、古御堂新林遺跡で古墳時代前期初頭の住居構築材にクリ、スダジイ、クスノキ科が認められた例があるが、古墳時代後期の住居構築材を対象とした分析例はほとんどない。そのため、現時点では当該期の木材利用についての詳細は不明であり、今後の資料蓄積が課題である。

#### 引用文献

- 平井 信二 1979 木の事典 第2巻 かなえ書房  
 平井 信二 1980 木の事典 第4巻 かなえ書房  
 平井 信二 1981 木の事典 第10巻 かなえ書房

### 第3節 名和飛田遺跡竪穴2 出土炭化材の放射性炭素年代測定

今回、名和飛田遺跡において、古墳時代後期末の遺構と考えられる竪穴2から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を、加速器分析研究所に依頼した。以下に報告結果を掲載する。なお、試料は第5章本文内掲載番号と一致する。

#### 放射性炭素年代測定結果報告書

株式会社 加速器分析研究所

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用しています。

2) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。

3) 付記した誤差は、次のように算出しています。

複数回(通常は4回)の測定値について<sup>2</sup>検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が1つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いています。

4) <sup>13</sup>Cの値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS測定の場合に同時に測定される<sup>13</sup>Cの値を用いることもあります。

<sup>13</sup>C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰;パーミル)で表したものです。

$$^{14}\text{C} = [ (^{14}\text{As} - ^{14}\text{AR}) / ^{14}\text{AR} ] \times 1000 \quad (1)$$

$$^{13}\text{C} = [ (^{13}\text{As} - ^{13}\text{APDB}) / ^{13}\text{APDB} ] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、<sup>14</sup>As：試料炭素の<sup>14</sup>C濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{S}}$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_{\text{S}}$

<sup>14</sup>AR：標準現代炭素の<sup>14</sup>C濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{R}}$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_{\text{R}}$

<sup>13</sup>Cは、質量分析計を用いて試料炭素の<sup>13</sup>C濃度( $^{13}\text{As} = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )を測定し、PDB(白亜紀のペレムナイト(矢石)類の化石)の値を基準として、それからのずれを計算します。

但し、IAAでは加速器により測定中に同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cも測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出した<sup>13</sup>Cを用いることもあります。この場合には表中に〔加速器〕と注記します。

また、<sup>14</sup>Cは、試料炭素が<sup>13</sup>C = -25.0(‰)であるとしたときの<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>AN)に換算した上で計算した値です。(1)式の<sup>14</sup>C濃度を、<sup>13</sup>Cの測定値をもとに次式のように換算します。

$$^{14}\text{An} = ^{14}\text{As} \times (0.975 / (1 + ^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{As} \text{として} ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{As} \times (0.975 / (1 + ^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{As} \text{として} ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$^{14}\text{C} = [ (^{14}\text{An} - ^{14}\text{AR}) / ^{14}\text{AR} ] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなります。多くの場合、同位体補正をしない<sup>14</sup>Cに相当するBP年代値が比較的良好その貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致します。

<sup>14</sup>C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern CARbon) がよく使われており、<sup>14</sup>Cとの関係は次のようになります。

$$^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 (\%)$$

$$\text{pMC} = ^{14}\text{C} / 10 + 100 (\%)$$

国際的な取り決めにより、この<sup>14</sup>CあるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional RAdioCARbon Age ; yrBP) が次のように計算されます。

$$T = - 8033 \times \ln [( ^{14}\text{C} / 1000 ) + 1 ]$$

$$= - 8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

Code No.	試料	BP年代およびの炭素同位体比
IAAA - 41202	試料採取場所：名和飛田遺跡 試料形態：炭化物 試料番号：試料 1	LibbyAge ( yrBP ) : 1,490 ± 40 <sup>13</sup> C ( ‰ ) ( 加速器 ) = - 28.27 ± 0.90 <sup>14</sup> C ( ‰ ) = - 168.9 ± 3.8 pMC ( % ) = 83.11 ± 0.38
	( 参考 ) <sup>13</sup> Cの補正無し	<sup>13</sup> C ( ‰ ) = - 174.4 ± 3.5 pMC ( % ) = 82.56 ± 0.35 Age ( yrBP ) : 1,540 ± 30
IAAA - 41203	試料採取場所：名和飛田遺跡 試料形態：炭化物 試料番号：試料 3	LibbyAge ( yrBP ) : 1,820 ± 40 <sup>13</sup> C ( ‰ ) ( 加速器 ) = - 27.78 ± 0.85 <sup>14</sup> C ( ‰ ) = - 203.1 ± 3.4 pMC ( % ) = 79.69 ± 0.34
	( 参考 ) <sup>13</sup> Cの補正無し	<sup>13</sup> C ( ‰ ) = - 207.6 ± 3.1 pMC ( % ) = 79.24 ± 0.31 Age ( yrBP ) : 1,870 ± 30
IAAA - 41204	試料採取場所：名和飛田遺跡 試料形態：炭化物 試料番号：試料 5	LibbyAge ( yrBP ) : 1,520 ± 30 <sup>13</sup> C ( ‰ ) ( 加速器 ) = - 26.92 ± 0.89 <sup>14</sup> C ( ‰ ) = - 172.1 ± 3.5 pMC ( % ) = 82.79 ± 0.35
	( 参考 ) <sup>13</sup> Cの補正無し	<sup>13</sup> C ( ‰ ) = - 175.3 ± 3.1 pMC ( % ) = 82.47 ± 0.31 Age ( yrBP ) : 1,550 ± 30

## 第4節 ガラス小玉の成分分析

藤根 久(パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

名和飛田遺跡の調査では、土坑内あるいは住居跡からスカイブルーやコバルトブルーのガラス玉が数個検出された。ここでは、これらガラス小玉の材質についてX線分析顕微鏡を用いて成分分析を行った。

### 2. 試料と方法

試料は、予めマイクロスコープを用いて写真撮影した(特論図版4・5)。試料は、スカイブルーを呈するガラス小玉3試料とコバルトブルーを呈するガラス小玉2試料の合計5試料である(表15)。

表15 成分分析を行ったガラス玉とその詳細

	種類	掲載 遺物番号	出土地区	遺 構	色 調	備 考
1	小玉	B22	E区N10	土坑21	スカイブルー	特論図版4(1a,1b)
2	小玉	B2	C区I2	竪穴住居6北西	スカイブルー	特論図版4(2a,2b)
3	小玉	B10	C区I2	竪穴住居6南西	スカイブルー	特論図版4(3a,3b)
4	小玉	B20	E区M10	土坑21	コバルトブルー	特論図版5(4a,4b)
5	小玉	B5	C区I2	竪穴住居6北西	コバルトブルー	特論図版5(5a,5b)

これら試料は、小容器にエチルアルコールを加えて超音波洗浄を行った後、両面テープで試料台に固定して非破壊で蛍光X線分析を行った。

測定は、(株)堀場製作所製XGT-5000Typeを用いた。測定条件は、X線導管径10 $\mu$ m、電圧50KV、電流1mA、測定時間300secである。定量計算は、標準試料を用いないIFP法(ファンダメンタルパラメータ法)で半定量分析を行った。

### 3. 結果

蛍光X線分析による半定量分析結果を酸化物の形で表した(表16)。また、各ガラス玉の蛍光X線スペクトル図を特論図版6・7に示す。ガラス小玉は、スカイブルーを呈するガラス小玉とコバルトブルーを呈するガラス小玉とで明瞭に成分が分かれた。

スカイブルーを呈するガラス小玉(1~3)では、酸化銅CuOや酸化錫SnOあるいは酸化鉛PbOが特徴的に検出された。

一方、コバルトブルーを呈するガラス小玉(4・5)では、酸化カルシウムCaOや酸化マンガンMnOあるいは酸化鉄Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>あるいは酸化バリウムBaOが特徴的に含まれていた。

全体的には、SiO<sub>2</sub>が約79.41~82.38%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が約1.51~4.31%、K<sub>2</sub>Oが9.07~11.49%、CaOが0.25

～1.17%などであった。その他では酸化アンチモン $\text{Sb}_2\text{O}_3$ やなどが若干含まれていた。

#### 4. 考察

ここでは、肥塚（1995）による古代ガラスの研究について概略を述べ、ガラス玉の化学組成について考察する。

##### 1) ガラス研究

日本において、ガラスはほぼ紀元前2世紀頃から流通する。それ以降3世紀頃までに出現するガラスは例外的なものを除くと、鉛珪酸塩ガラスの鉛バリウムガラス( $\text{PbO-BaO-SiO}_2$  system)と鉛ガラス( $\text{PbO-SiO}_2$  system)、アルカリ珪酸塩ガラスのカリガラス( $\text{K}_2\text{O-(Al}_2\text{O}_3\text{)-SiO}_2$  system)である。弥生時代から古墳時代へと移行する3世紀後半から4世紀にかけては、鉛珪酸塩ガラスの流通は途絶えて、代わって2種類のソーダ石灰ガラス( $\text{Na}_2\text{O-CaO-SiO}_2$  systemと $\text{Na}_2\text{O-Al}_2\text{O}_3\text{-CaO-SiO}_2$  system)が多量に流通するようになる。一方、弥生時代から流通したカリガラスは出土量そのものが少なくなるが、その後も流通を続ける。しかし、6世紀後半から7世紀初頭にはカリガラスの流通は途絶え、代わって鉛ガラスが再び流通を始め、次第にソーダ石灰ガラスも衰退していくとされる。

##### 2) 出土ガラス小玉の化学組成

ガラス遺物の表面は少なからず風化しており完全非破壊で分析しているため、製作当時の化学組成を示していないことが予想される。ガラス玉は風化すると、酸化カリウム( $\text{K}_2\text{O}$ )や酸化ナトリウム( $\text{Na}_2\text{O}$ )等が顕著に減少する傾向がある(肥塚 前出)。なお、ナトリウムNaは、感度が低いため測定は行っていない。

鉛バリウムガラスや鉛ガラスは、鉛が特徴的に多く含まれるが、スカイブルーを呈するガラス小玉では、全体的に酸化鉛( $\text{PbO}$ )が1%前後と低く、またコバルトブルーを呈するガラス小玉も酸化バリウム( $\text{BaO}$ )が0.1%前後と低いことから、いずれのガラス小玉もアルカリ珪酸塩ガラスに分類される。なお、ナトリウムを測定していないが、酸化カリウム( $\text{K}_2\text{O}$ )が9.07～11.49%と多いことから、いずれもカリガラスと考える。

なお、スカイブルーを呈するガラス小玉は酸化銅の着色剤により明るいブルーを呈する。一方、コバルトブルーを呈するガラス小玉は、酸化マンガンや酸化鉄により暗い紫色に近い色を呈することが理解された。

#### 引用文献

肥塚 隆保(1995)「古代ガラスの材質」. 古代に挑戦する自然科学、第9回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編、クバプロ、94～108p

表16 蛍光X線分析によるガラス玉の半定量分析結果

No.	種類	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	SiO <sub>2</sub> (%)	K <sub>2</sub> O (%)	CaO (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	MnO (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	CuO (%)	ZnO (%)	Rb <sub>2</sub> O (%)	SrO (%)	Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	ZrO <sub>2</sub> (%)	SnO <sub>2</sub> (%)	Sb <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	BaO (%)	PbO (%)	合計	分類
1	小玉	4.31	80.32	9.07	0.25	0.24	0.02	0.01	0.75	3.12	0.01	0.08	0.00	0.00	0.05	0.11	0.03	0.03	1.60	100.00	カリガラス
2	小玉	4.27	79.41	11.49	0.60	0.18	0.01	0.01	0.76	2.08	0.01	0.07	0.00	0.00	0.04	0.27	0.05	0.00	0.75	100.00	カリガラス
3	小玉	3.72	82.38	9.63	0.33	0.20	0.03	0.02	0.68	2.05	0.02	0.06	0.00	0.00	0.02	0.10	0.03	0.00	0.71	99.98	カリガラス
4	小玉	2.64	81.37	9.71	1.17	0.32	0.02	1.93	2.52	0.08	0.01	0.02	0.01	0.00	0.01	0.01	0.03	0.13	0.02	100.00	カリガラス
5	小玉	1.51	80.23	10.77	1.08	0.17	0.02	3.30	2.58	0.05	0.01	0.03	0.01	0.00	0.01	0.00	0.03	0.17	0.01	99.98	カリガラス
	最大値	1.51	79.41	9.07	0.25	0.17	0.01	0.01	0.68	0.05	0.01	0.02	0.00	0.00	0.01	0.00	0.03	0.00	0.01		
	最小値	4.31	82.38	11.49	1.17	0.32	0.03	3.30	2.58	3.12	0.02	0.08	0.01	0.00	0.05	0.27	0.05	0.17	1.60		

## 第5節 名和飛田遺跡出土土器の胎土分析

白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）

### 1．分析の目的

名和飛田遺跡から出土した弥生時代中期、古墳時代中期末～後期の土器で時期が異なれば胎土がどうなるか検討した。また、弥生中期の土器では、門前上屋敷・茶畑第1・茶畑六反田の各遺跡と比較した。そして、古墳時代後期の土師器、須恵器、移動式竈と名和中畝遺跡の同時期の土器と比較し、胎土に差異があるかどうか調べた。

### 2．分析方法

分析は、蛍光X線分析法と実体顕微鏡による胎土観察の二つの分析法で検討した。

蛍光X線分析法では、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、胎土中の成分（元素）量を調べた。測定した成分は、13元素でそのうちK（カリウム）、Ca（カルシウム）、Rb（ルビウム）、Sr（ストロンチウム）などの成分に顕著な違いがあることから、これらの成分を用いて、XY散布図を作成し検討した。

実体顕微鏡による土器表面の観察では、胎土に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさ、含有量について調べた。

分析した土器は、表17に示した弥生時代15点、古墳時代46点の合計61点である。

### 3．蛍光X線分析法による分析結果

図153 K - Ca、図154 Sr - Rbの散布図では、遺跡内での時期ごとで胎土に違いがあるかどうか検討した。その結果、弥生中期と古墳中期末～後期がある程度識別できた。また、古墳後期の須恵器は全体として広く散漫な分布であるが、特にCa量（0.5%以下）、Sr量（200ppm以下）が少ないところに分布するものが多かった。

図155 K - Ca、図156 Sr - Rbの散布図では、弥生中期の各遺跡との胎土比較を実施したところ、各遺跡とも、胎土差はなくほぼ同じ領域に分布した。

図157 K - Ca、図158 Sr - Rbの散布図では古墳後期の同様な遺物が出土している名和中畝遺跡と胎土を比較した。その結果、土師器（甕・移動式竈）は中畝の土師器と類似し、須恵器も同様であった。

### 4．実体顕微鏡観察（肉眼観察）による結果

実体顕微鏡による肉眼観察では胎土に含まれる砂粒の岩石、鉱物の種類を同定した。観察倍率は10倍～30倍で随時観察した。

弥生中期の土器には3mm以下の石英、長石、0.5mm以下の角閃石と2mm以下の安山岩が少量含まれていた。また、古墳後期の土師器（甕）にも弥生と同様な砂粒が含まれていたが、弥生に比べ石英や安山岩の岩片が多く含まれていた。

## 5. まとめ

名和飛田遺跡出土土器の胎土分析(蛍光X線分析法・砂粒観察)を実施した結果、以下のことが指摘できよう。

遺跡内で時期ごとに胎土に違いがあるかどうかでは、弥生中期と古墳後期の分布域が異なる傾向にあった。また、砂粒観察では基本的な砂粒構成は変わらないが、古墳の土器に石英や安山岩の砂粒が多く含まれていた。この違いが分析値にもあらわれたことが推測される。

遺跡ごとにおける弥生中期の胎土比較では、今回比較した遺跡はいずれも胎土が異なるような遺跡はなかった。逆に非常に類似していた。砂粒観察でも同様の結果であった。

古墳後期の名和中畝との比較では、土師器・須恵器とも分布域がほぼ似ていた。ただ、飛田の須恵器に関しては、Ca量が0.5以下にほとんどがまとまり、それ以外は広く散漫な分布をするものがあった。このまとまる須恵器は、ほぼ同一の生産地からもたらされたのか。生産地試料の蓄積を行い検討する必要がある。

この分析の機会を与えていただいた、鳥取県埋蔵文化財センターの職員の方々には、いろいろご教示いただいた。末筆ではありますが記して感謝いたします。

第5節 名和飛田遺跡出土土器の胎土分析

表17 名和飛田遺跡出土土器分析値一覧表(%)ただし、Rb・Sr・Zrはppm

掲載番号	地区	遺構・層位	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	時代
5	第2調査地	Ⅲ層	須恵・高杯	65.65	0.91	19.32	6.20	0.08	2.08	0.63	3.16	1.57	0.12	200	201	356	古墳時代後期末
89	第3調査地A区	竪穴住居1	土師・甕	66.20	1.05	19.98	5.05	0.10	2.06	1.32	2.06	1.82	0.12	239	423	324	古墳時代中期末
90	第3調査地A区	竪穴住居1	土師・甕	65.58	0.98	19.83	5.12	0.06	1.88	1.84	2.35	1.95	0.22	259	538	256	古墳時代中期末
91	第3調査地A区	竪穴住居1	土師・甕	63.56	1.04	20.87	7.24	0.09	2.11	0.77	2.25	1.82	0.05	274	271	304	古墳時代中期末
92	第3調査地A区	竪穴住居1	土師・甕	65.20	1.04	20.64	5.05	0.05	2.03	1.08	2.84	1.73	0.10	199	348	318	古墳時代中期末
99	第3調査地A区	土坑4	土師・甕	62.67	0.97	21.55	6.82	0.10	2.11	0.78	3.18	1.51	0.13	197	270	286	古墳時代中期末
107	第3調査地E区	竪穴住居2	須恵・杯蓋	68.56	1.04	19.30	4.00	0.04	1.98	0.86	2.46	1.44	0.13	182	310	367	古墳時代後期末
112	第3調査地E区	竪穴住居2	須恵・杯身	69.00	0.96	18.59	4.33	0.04	1.99	0.38	2.18	2.14	0.15	227	123	340	古墳時代後期末
116	第3調査地E区	竪穴住居2	土師・椀	65.98	1.04	20.03	4.53	0.06	1.92	1.62	2.61	1.96	0.05	239	484	312	古墳時代後期末
118	第3調査地E区	竪穴住居2	土師・甕	64.13	1.08	21.22	4.63	0.03	1.98	1.58	2.96	2.02	0.16	208	505	320	古墳時代後期末
119	第3調査地E区	竪穴住居2	土師・甕	64.92	1.00	21.24	4.17	0.04	1.93	1.79	2.57	1.97	0.15	215	524	272	古墳時代後期末
120	第3調査地E区	竪穴住居2	土師・甕	66.03	1.01	20.04	4.70	0.06	1.98	1.62	2.26	1.98	0.11	245	482	292	古墳時代後期末
122	第3調査地E区	竪穴住居2	土師・甕	63.75	1.14	21.57	4.65	0.05	2.13	1.81	2.68	1.88	0.12	182	570	318	古墳時代後期末
123	第3調査地E区	竪穴住居3	須恵・杯蓋	68.02	1.18	19.07	5.49	0.06	2.06	0.42	1.93	1.51	0.08	170	138	403	古墳時代後期末
125	第3調査地E区	竪穴住居3	須恵・杯蓋	66.99	1.15	19.30	5.55	0.07	1.92	0.40	2.43	1.73	0.15	237	145	404	古墳時代後期末
126	第3調査地E区	竪穴住居3	須恵・杯蓋	64.48	1.37	19.97	7.93	0.08	1.89	0.35	2.24	1.42	0.07	156	148	474	古墳時代後期末
128	第3調査地E区	竪穴住居3	須恵・杯身	67.34	1.33	19.76	5.35	0.06	1.94	0.32	2.20	1.43	0.07	191	124	435	古墳時代後期末
132	第3調査地E区	竪穴住居3	須恵・壺	67.97	1.29	17.76	6.14	0.08	2.09	0.46	2.24	1.67	0.12	211	171	463	古墳時代後期末
133	第3調査地E区	竪穴住居3	須恵・高杯	69.60	0.94	18.04	4.08	0.05	1.85	1.10	2.38	1.60	0.14	242	323	371	古墳時代後期末
142	第3調査地E区	竪穴住居3	土師・長胴甕	64.37	1.17	21.21	4.69	0.04	1.88	1.47	2.96	1.93	0.09	143	478	306	古墳時代後期末
143	第3調査地E区	竪穴住居3	土師・鉢?	66.45	1.03	18.88	4.86	0.07	2.01	1.69	2.61	1.99	0.18	213	492	301	古墳時代後期末
146	第3調査地E区	竪穴住居3	須恵・杯身	71.48	0.93	17.31	3.91	0.04	1.77	0.39	1.61	2.14	0.14	229	131	373	古墳時代後期末
147	第3調査地E区	竪穴住居3	須恵・杯身	70.53	1.07	17.01	4.60	0.05	1.86	0.55	2.00	1.93	0.13	234	162	412	古墳時代後期末
150	第3調査地E区	竪穴住居3	土師・甕	61.90	2.07	21.05	8.24	0.09	1.98	0.82	1.48	1.95	0.18	160	186	548	古墳時代後期末
155	第3調査地E区	竪穴住居3	甕	65.99	1.00	19.57	4.96	0.06	1.94	1.45	2.58	1.99	0.10	211	465	308	古墳時代後期末
158	第3調査地E区	竪穴住居3	須恵・杯身	67.65	1.62	20.77	5.00	0.07	1.81	0.74	1.04	0.97	0.13	130	171	466	古墳時代後期末
159	第3調査地E区	竪穴住居3	須恵・杯蓋	65.91	0.99	20.26	5.62	0.07	1.98	0.56	2.23	1.94	0.12	238	215	303	古墳時代後期末
161	第3調査地E区	竪穴住居3 P23	須恵・有蓋高杯	63.25	0.89	20.70	5.02	0.05	2.71	0.48	4.86	1.72	0.10	198	157	267	古墳時代後期末
162	第3調査地E区	竪穴住居3	須恵・壺or壺	64.53	1.02	20.45	7.28	0.09	2.19	0.43	1.99	1.64	0.10	204	151	354	古墳時代後期末
163	第3調査地E区	竪穴住居3	土師・甕	66.73	1.01	19.17	4.99	0.08	2.00	1.48	2.03	2.11	0.13	208	452	280	古墳時代後期末
166	第3調査地E区	竪穴住居3	土師・甕	64.97	0.91	20.57	4.68	0.05	2.05	1.81	2.56	1.93	0.25	243	529	272	古墳時代後期末
167	第3調査地E区	竪穴住居3	土師・甕	66.47	1.00	19.45	4.50	0.05	2.02	1.57	2.56	1.96	0.17	261	501	283	古墳時代後期末
172	第3調査地C区	竪穴1	土師・甕	65.28	0.95	20.80	4.89	0.04	1.94	1.44	2.56	1.77	0.11	171	485	287	古墳時代後期末
173	第3調査地C区	竪穴1	土師・甕	64.42	0.96	20.11	4.95	0.04	2.20	1.72	3.19	2.13	0.07	206	542	287	古墳時代後期末
174	第3調査地C区	竪穴1	土師・甕	65.42	1.03	20.95	4.92	0.06	2.10	1.12	2.20	1.79	0.14	194	358	328	古墳時代後期末
176	第3調査地C区	竪穴1	土師・甕	65.87	1.13	20.85	5.02	0.06	2.05	1.03	2.01	1.66	0.13	183	311	292	古墳時代後期末
177	第3調査地E区	竪穴2	須恵・杯蓋	66.27	1.49	19.26	5.79	0.07	2.16	0.35	2.92	1.41	0.11	179	142	493	古墳時代後期末
178	第3調査地E区	竪穴2北西	須恵・杯身	66.23	1.05	19.05	3.10	0.04	2.63	0.40	5.72	1.49	0.13	150	152	332	古墳時代後期末
179	第3調査地E区	竪穴2	須恵・杯身	66.65	1.06	21.49	4.02	0.05	1.90	0.75	2.58	1.17	0.15	128	255	397	古墳時代後期末
181	第3調査地E区	竪穴2	須恵・高杯	64.47	1.25	22.50	5.34	0.05	2.10	0.33	2.50	1.15	0.12	127	121	429	古墳時代後期末
183	第3調査地E区	竪穴2	土師・甕	63.66	0.99	19.87	5.95	0.07	2.08	1.11	3.60	2.16	0.23	186	381	515	古墳時代後期末
184	第3調査地E区	竪穴2	土師・甕	65.89	0.86	19.43	4.41	0.06	2.18	1.62	3.08	2.05	0.14	245	487	275	古墳時代後期末
185	第3調査地E区	竪穴2北西	土師・甕	65.05	0.93	22.80	3.98	0.05	1.97	1.26	1.71	1.68	0.38	184	391	299	古墳時代後期末
186	第3調査地E区	竪穴2南東	土師・甕	65.73	1.07	19.44	5.10	0.06	1.97	1.30	3.10	1.91	0.13	226	414	281	古墳時代後期末
187	第3調査地E区	竪穴2	土師・甕	65.83	1.17	20.98	5.36	0.06	1.86	0.89	1.90	1.71	0.06	205	267	354	古墳時代後期末
188	第3調査地E区	竪穴2	甕	64.95	1.09	21.58	4.79	0.05	1.89	1.70	1.65	1.92	0.12	198	532	320	古墳時代後期末
308	第3調査地E区	竪穴住居4	弥生・甕	66.58	0.76	21.00	4.96	0.06	1.85	0.83	2.20	1.16	0.42	120	278	261	弥生時代中期
309	第3調査地E区	竪穴住居4	弥生・甕	63.66	1.01	23.66	4.04	0.05	2.17	0.47	2.62	2.01	0.11	244	151	285	弥生時代中期
310	第3調査地E区	竪穴住居4	弥生・甕	65.50	1.14	21.11	4.49	0.06	2.00	1.35	2.56	1.36	0.29	140	376	287	弥生時代中期
318	第3調査地E区	竪穴住居5	弥生・台付壺	65.73	0.99	19.52	5.53	0.07	1.99	0.87	2.80	1.93	0.26	247	301	328	弥生時代中期
325	第3調査地E区	竪穴4	弥生・甕	66.89	0.94	21.03	4.40	0.11	1.90	0.62	2.36	1.53	0.07	176	164	287	弥生時代中期
326	第3調査地E区	竪穴5	弥生・甕	68.35	1.01	19.34	3.39	0.04	1.86	1.04	2.87	1.73	0.16	177	345	377	弥生時代中期
327	第3調査地E区	竪穴5	弥生・壺	60.72	1.16	22.23	9.73	0.12	1.80	0.92	1.55	1.00	0.56	108	287	313	弥生時代中期
328	第3調査地E区	竪穴5	弥生・甕	65.40	1.03	22.32	4.30	0.03	1.77	0.47	2.59	1.69	0.21	143	169	321	弥生時代中期
334	第3調査地E区	竪穴5	弥生・甕	63.65	0.95	24.06	3.85	0.07	2.01	1.12	2.62	1.35	0.18	139	335	305	弥生時代中期
414	第3調査地A区	黒色土	弥生・甕	63.99	0.96	23.19	4.63	0.04	2.01	0.54	2.68	1.71	0.07	228	163	296	弥生時代中期
417	第3調査地E区	包含層	弥生・甕	59.68	1.08	24.41	7.64	0.09	2.16	0.75	2.88	0.97	0.10	105	240	325	弥生時代中期
420	第3調査地E区	包含層	弥生・甕	64.23	0.97	24.37	3.55	0.06	1.95	0.87	2.52	1.14	0.11	159	306	323	弥生時代中期
430	第3調査地E区	包含層	弥生・甕	61.41	1.00	23.93	6.50	0.07	1.96	0.68	2.88	1.28	0.14	165	265	340	弥生時代中期
439	第3調査地E区	包含層	弥生・甕	62.89	0.98	24.32	4.31	0.05	1.97	1.00	2.85	1.27	0.22	118	294	312	弥生時代中期
441	第3調査地E区	包含層	弥生・甕	64.61	0.91	21.78	5.72	0.10	1.89	0.52	2.38	1.71	0.13	241	156	311	弥生時代中期

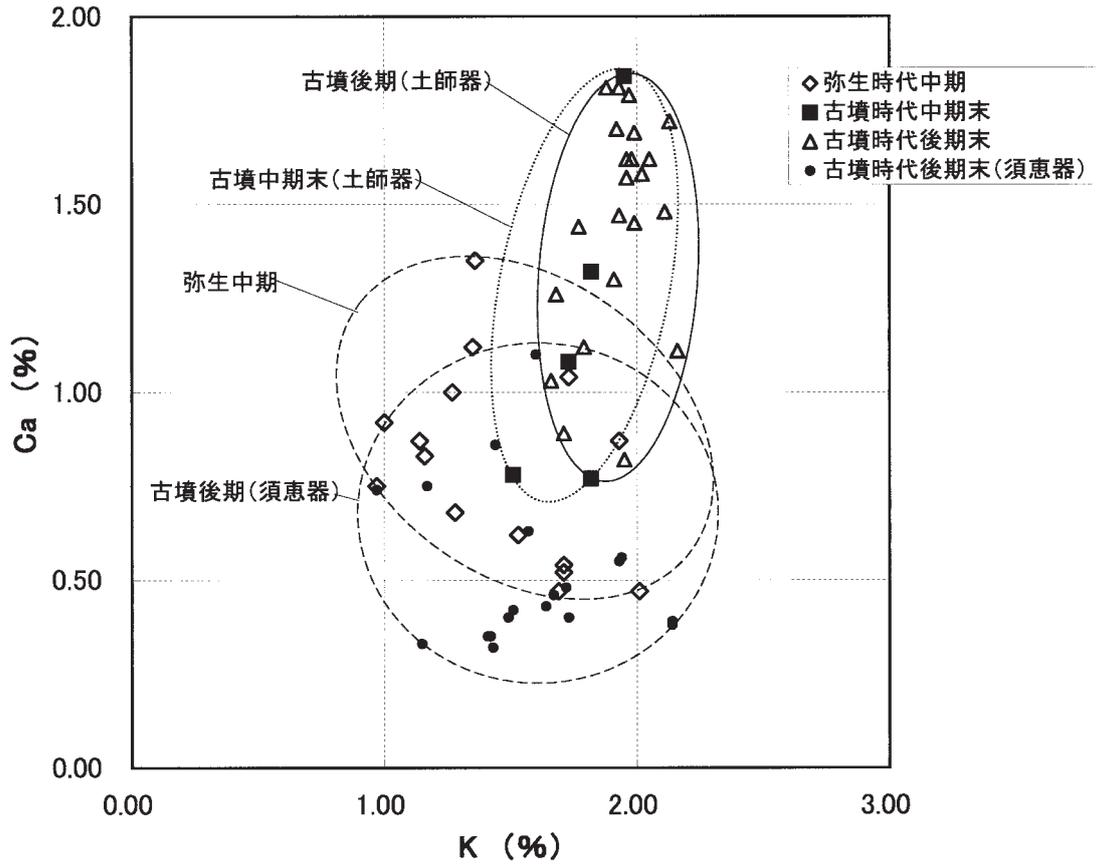


図153 遺跡内での時期別による胎土比較 (K-Ca)

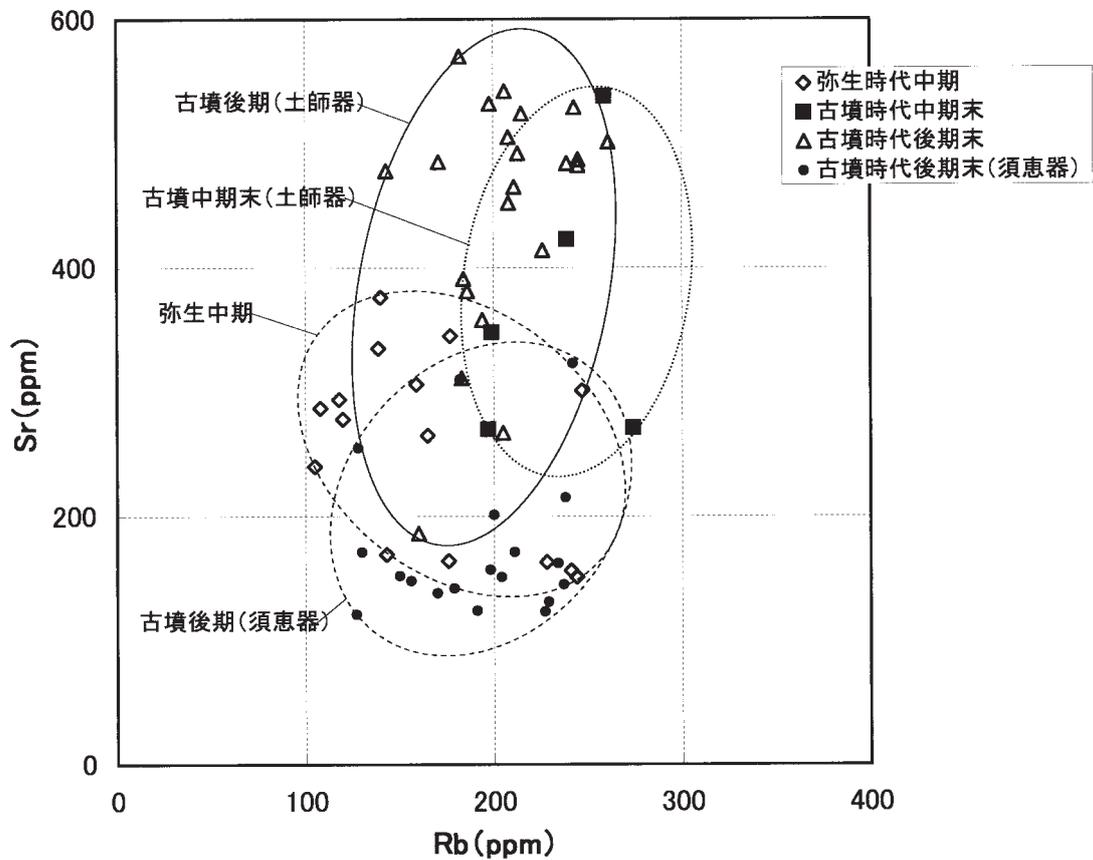


図154 遺跡内での時期別による胎土比較 (Rb-Sr)

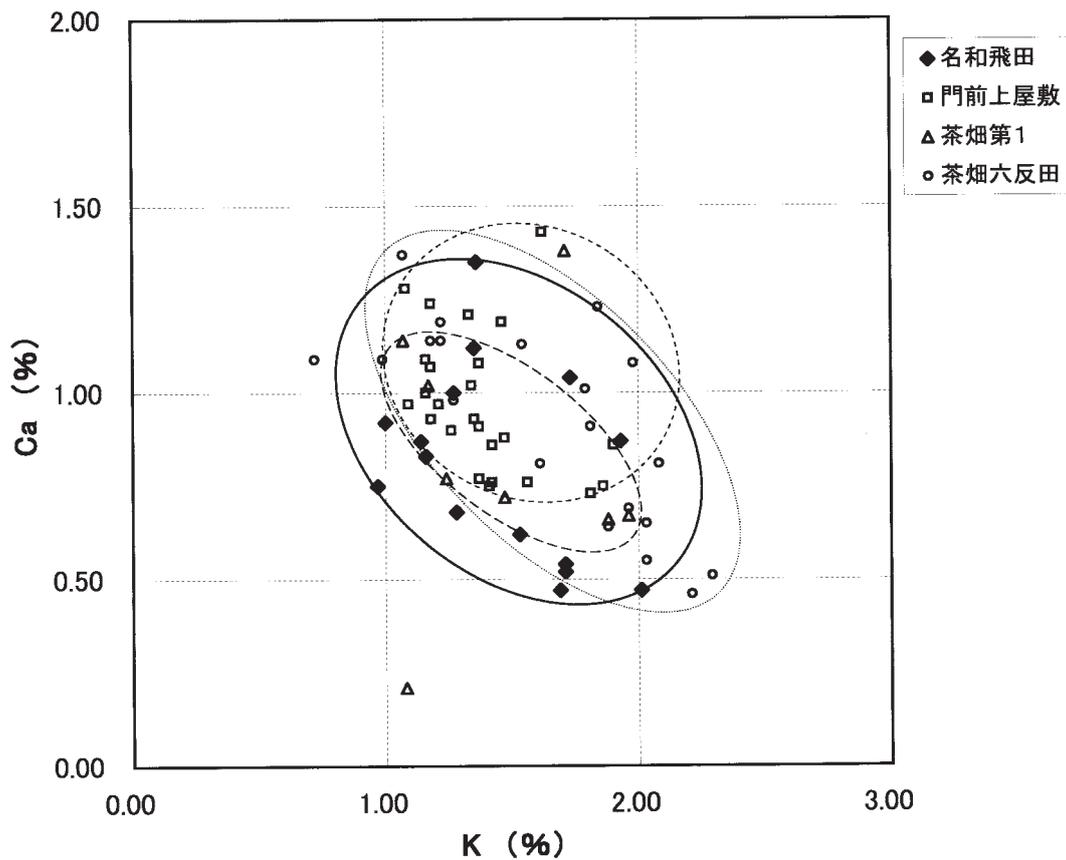


図155 弥生中期の各遺跡における胎土比較 (K-Ca)

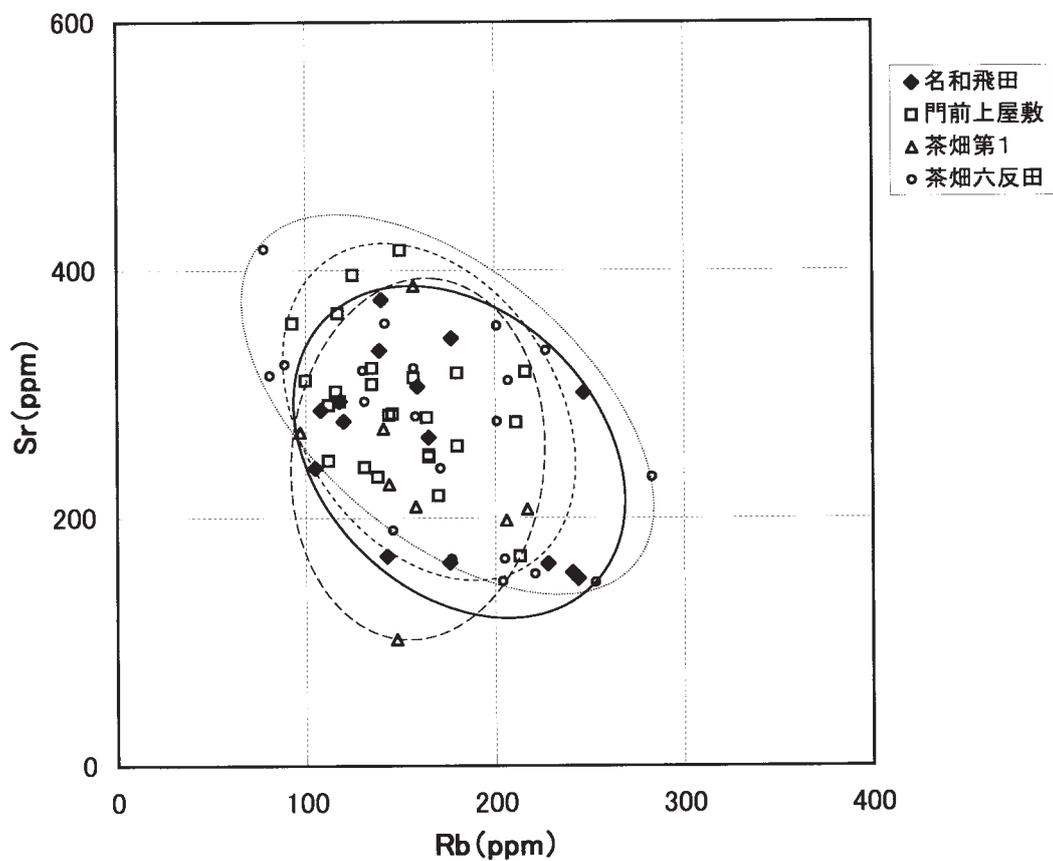


図156 弥生中期の各遺跡における胎土比較 (Rb-Sr)

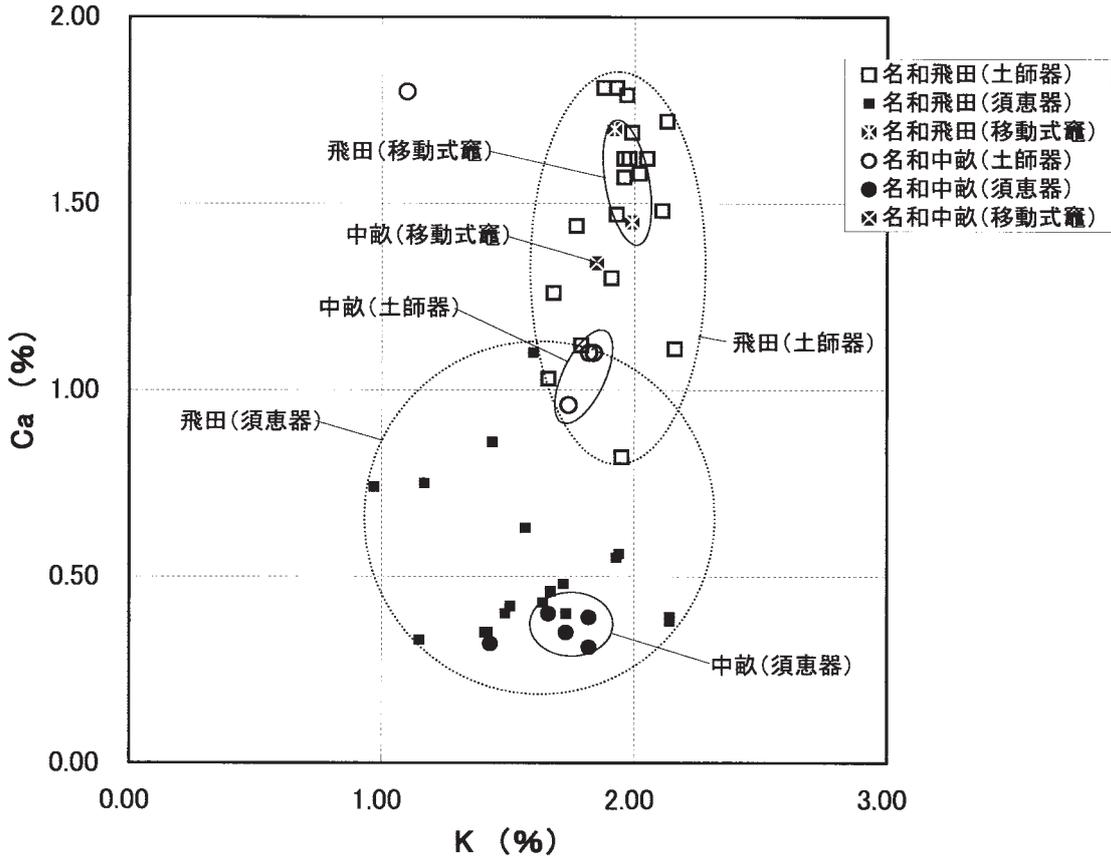


図157 古墳後期の器種・焼成別胎土の比較(K-Ca)

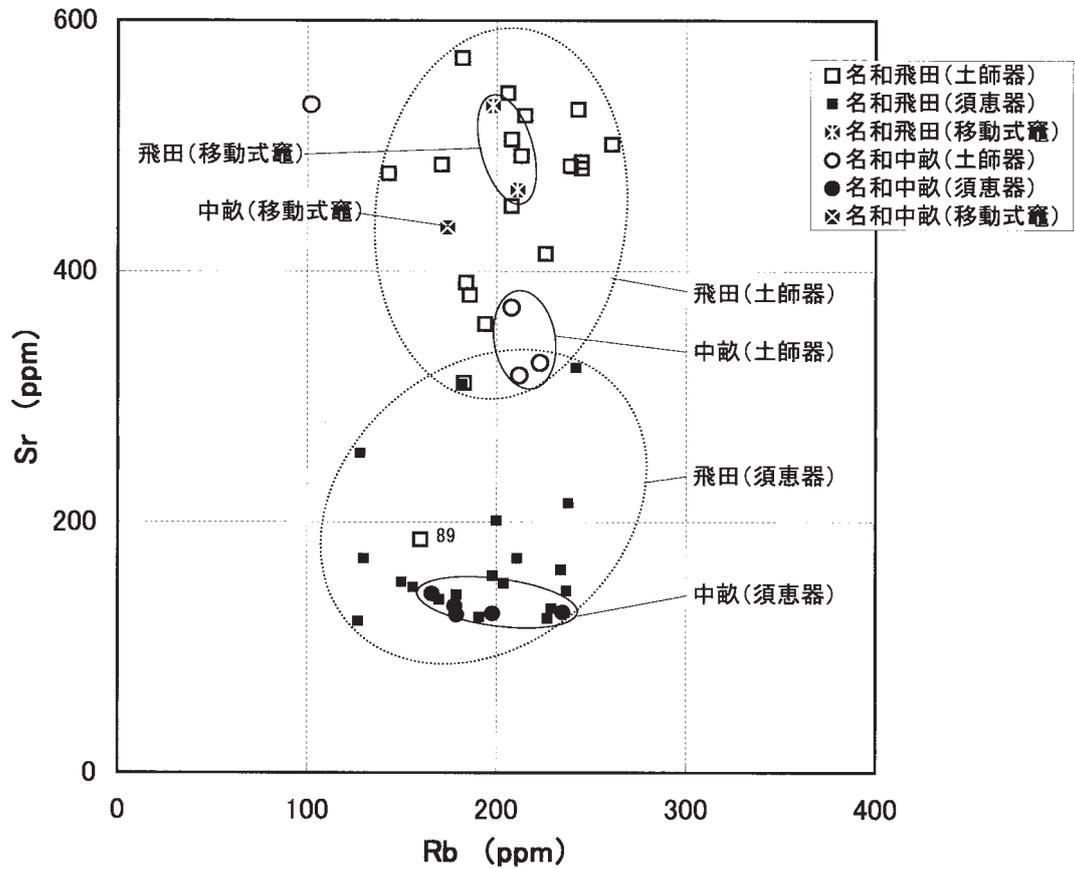


図158 古墳後期の器種・焼成別胎土の比較(Rb-Sr)

## 第6節 石器石材の原産地推定

藤根 久(パレオ・ラボ)

## 1. はじめに

名和飛田遺跡の調査では、黒曜石製剥片、ガラス質安山岩製の打製石剣や石匙あるいは剥片が出土した。ここでは、これら石器について蛍光X線分析計を用いて黒曜石あるいはガラス質安山岩の原産地の検討を行った。

## 2. 試料と方法

試料は、黒曜石製石器5試料とガラス質安山岩製石器5試料である(表18)。試料と方法は、黒曜石製石器とガラス質安山岩製石に分けて述べる。

## [ 黒曜石製石器 ]

試料は、精製水で超音波洗浄した後、メラミンフォーム製のスポンジに精製水を少量含ませて試料表面に付着する土壌等の汚れを除去した。

表18 分析した黒曜石製・ガラス質安山岩製石器

	種類	掲載 遺物番号	取上	出土地区 遺構	層位	備考
1	加工痕のある剥片	S 237	456	B区G3	層	黒曜石
2	剥片		636 1	A区土坑22	埋土中	黒曜石
3	剥片		467	B区G2	層	黒曜石
4	剥片		273 1	A区C2	層	黒曜石
5	剥片		643	A区土坑22	埋土中	黒曜石
6	打製石剣 (局部磨製)	S 234	1497	E区O8	層	ガラス質安山岩
7	石匙	S 181	1986	C区H2	層	ガラス質安山岩
8	剥片		636 2	A区土坑22	埋土中	ガラス質安山岩
9	剥片		636 3	A区土坑22	埋土中	ガラス質安山岩
10	剥片		273 2	A区C2	層	ガラス質安山岩

ガラス質安山岩製石器試料は、精製水で超音波洗浄して、比較的平坦な面(あるいは凸面)を選んで測定面とした。なお、試料6と7は、エアブラシにより風化層を一部除去して測定した。

測定に用いた蛍光X線分析計は、セイコー電子工業(株)製の卓上型蛍光X線分析計SEA-2001Lである。X線管球はロジウム(Rh)、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、電圧50KV、測定時間300秒、照射径10mm、電流自動設定、測定室真空である。

測定した元素は、主成分元素のカリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)と微量元素のルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素である。各元素は、定量計算は行わずX線強度(cps)のみ測定した。

黒曜石の産地推定は、望月(1999)が示した蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定の判別図法と同様の方法を用いた。すなわち、主成分元素のカリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)と微量元素のルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)

の合計7元素を蛍光X線分析で測定し、各元素のX線強度(cps)から以下に示す指標値を計算する。

$$1) \text{Rb分率} = \text{Rb} \times 100 / (\text{Rb} + \text{Sr} + \text{Y} + \text{Zr}) \quad 2) \text{Sr分率} = \text{Sr} \times 100 / (\text{Rb} + \text{Sr} + \text{Y} + \text{Zr})$$

$$3) \text{Mn} \times 100 / \text{Fe} \quad 4) \log(\text{Fe}/\text{K})$$

これら指標値を用いた2種類の判別図(横軸Rb分率 - 縦軸Mn × 100/Feの判別図と横軸Sr分率 - 縦軸log(Fe/K)の判別図)を作成し、日本各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、原産地を推定するものである。判別図に用いる黒曜石原産地及び判別群名称は表19に示す。判別群名称は望月(2002)を参考にした。

#### [ ガラス質安山岩製石器 ]

ガラス質安山岩の原産地推定は、望月・堤(1996)などが示した蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定の判別図法と同様の方法を用いた。判別図を作成するために測定した原石試料は、奈良県・大阪府境の二上山周辺3ヶ所(二上山北側谷、二上山太子谷、春日山みかん畑)、四国の国分台周辺9カ所(国分台下みかん畑、自衛隊演習場横、高産霊神社、神谷神社、雌山、雄山、城山南側、城山北側、金山)から採取したサヌカイトである。下呂石は、岐阜県下呂市湯ヶ峰林道で採取したガラス質流紋岩である。また、(財)鳥取県埋蔵文化財センターから提供していただいた青谷2試料と東郷町麻畑1試料のガラス質安山岩も測定した。

### 3. 結果および考察

表19に、黒曜石製石器およびガラス質安山岩製石器について蛍光X線分析を行った各元素のX線強度(cps)と計算による指標値を示す。

#### [ 黒曜石製石器 ]

図159には主な黒曜石原石をプロットした判別図を示す。各判別群で重複している箇所があるため各判別群を楕円で示す。

図159の左図では、試料 1、 3、 4、 5は隠岐久見崎群域に、試料 2は隠岐箕浦海岸群域にそれぞれプロットされた。一方、図159の右図では、青森県深浦八森山群と重複して隠岐産黒曜石が分布するが、4がこの領域の下方に位置し、3がさらに下方の北海道白滝黒曜の沢群に近い位置にプロットされた。

両者の判別図から、試料 2が隠岐箕浦海岸群、その他の4試料が隠岐久見崎群と推定される。なお、指標値から検討した結果、九州産黒曜石の可能性は低い(沼津工業高等専門学校望月明彦氏の私信による)。

#### [ ガラス質安山岩製石器 ]

図160には主なガラス質安山岩原石(サヌカイトおよび下呂石を含む)をプロットした判別図を示す。各判別群で重複している箇所があるため各判別群を楕円で示す。

図160の上図では、試料は、二上山周辺および四国の国分台周辺のサヌカイトの多くが集中する領域のやや上方にプロットされた。なお、提供していただいた青谷あるいは麻畑のガラス質安山岩

は左方にプロットされた。一方、図160の下図では、城山系あるいはその左方および金山域の上方にプロットされた。なお、提供していただいた青谷あるいは麻畑のガラス質安山岩は、青谷が二上山系（二上山＋春日山）の上方に、麻畑が高産霊神社2群の上方にそれぞれプロットされた。

両者の判別図から、城山系や金山などの四国産サヌカイトの可能性が高い。なお、図160の上図において四国の国分台周辺のサヌカイト領域からやや外れることから、未知四国産サヌカイトあるいは他地域ガラス質安山岩の可能性も否定できない。

#### 4. おわりに

ここでは、黒曜石製あるいはガラス質安山岩製の石器について、蛍光X線分析による原産地推定について検討した。その結果、黒曜石製石器は隠岐産であることが分かった。一方、ガラス質安山岩製石器については、四国サヌカイトの可能性高いことが分かったが、完全に一致しなかったことから、今後原石調査を行う必要がある。なお、黒曜石については沼津工業高等専門学校望月明彦氏に原石の提供および助言を頂きました。ここに感謝の意を表します。

#### 引用文献

望月昭彦・堤 隆（1996）黒曜石の産地推定による南関東の細石刃文化の研究（ ）、日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集、112-113.

望月明彦（1999）上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定、埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2 上和田城山遺跡篇、大和市教育委員会、172-179p.

望月明彦（2002）茅野市馬捨場遺跡出土黒曜石製石器の産地推定、長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書58、広域営農団地農道整備事業八ヶ岳地区埋蔵文化財発掘調査報告書 茅野市内、馬捨場遺跡、長野県埋蔵文化財センター、149-158p.

No.	遺物名	石質	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	log (Fe/K)	原産地推定
1	石器	黒曜石	30.244	4.056	148.651	13.681	0.000	5.469	30.096	27.781	2.729	0.000	0.692	隠岐久見崎群
2	剥片	黒曜石	35.789	4.071	162.287	11.897	0.000	4.646	37.499	22.014	2.509	0.000	0.657	隠岐箕浦海岸群
3	剥片	黒曜石	43.798	2.875	125.624	12.518	0.000	5.249	26.207	28.467	2.288	0.000	0.458	隠岐久見崎群
4	剥片	黒曜石	30.212	3.830	134.586	13.220	0.000	5.223	27.320	28.888	2.845	0.000	0.649	隠岐久見崎群
5	剥片	黒曜石	25.760	3.315	129.886	11.935	0.096	5.359	26.632	27.112	2.552	0.218	0.703	隠岐久見崎群
6	打製石剣 (局部磨製)	ガラス質安山岩	14.759	7.129	297.682	5.327	13.921	1.846	16.140	14.307	2.395	37.388	1.305	(四国産サヌカイト)
7	石匙	ガラス質安山岩	14.065	7.134	314.465	4.825	15.554	1.831	15.667	12.739	2.269	41.064	1.349	(四国産サヌカイト)
8	剥片	ガラス質安山岩	17.353	8.066	319.420	5.789	16.888	2.510	19.373	12.991	2.525	37.899	1.265	(四国産サヌカイト)
9	剥片	ガラス質安山岩	18.830	8.662	359.601	5.724	19.118	2.587	21.758	11.637	2.409	38.868	1.281	(四国産サヌカイト)
10	剥片	ガラス質安山岩	16.258	6.593	286.685	4.813	16.248	2.228	18.022	11.651	2.300	39.331	1.246	(四国産サヌカイト)

表19 黒曜石製・ガラス質安山岩製石器の測定結果と原産地推定

表20 黒曜石原産地の判別群名称(望月、2002を参考)

都道府県	エリア	判別群	記号	原石採取地
北海道	白滝	八号沢群	STHG	
		黒曜の沢群	STKY	
	赤井川	曲川群	AIMK	
青森	木造	出来島群	KDDK	出来島
	深浦	八森山群	HUHM	岡崎浜
秋田	男鹿	金ヶ崎群	OGKS	金ヶ崎温泉、脇本海岸
		脇本群	OGWM	脇本海岸
岩手	北上川	北上折居2群	KK02	北上川
山形	羽黒	月山群	HGGS	月山荘前
新潟	新津	金津群	NTKT	金津
	新発田	板山群	SBIY	板山牧場
	佐渡	真光寺群	SDSK	真光寺山
		金井二ツ坂群	SDKH	二ツ坂
宮城	宮崎	湯ノ倉群	MZYK	湯ノ倉
	色麻	根岸群	SMNG	根岸
	仙台	秋保1群	SDA1	土蔵
		秋保2群	SDA2	土蔵
	塩釜	塩釜群	SGSG	塩釜
栃木	高原山	甘湯沢群	THAY	甘湯沢
		七尋沢群	THNH	七尋沢、宮川、枝持沢
長野	和田(WD)	鷹山群	WDTY	鷹山、東餅屋
		小深沢群	WDKB	小深沢
		土屋橋西群	WDTN	土屋橋西
	和田(WO)	ぶどう沢群	WOBD	ぶどう沢
		牧ヶ沢群	WOMS	牧ヶ沢下
		高松沢群	WOTM	高松沢
	諏訪	星ヶ台群	SWHD	星ヶ台、星ヶ塔
蓼科	冷山群	TSTY	冷山、麦草峠、麦草峠東	
神奈川	箱根	芦ノ湯群	HNAY	芦ノ湯
		畑宿群	HNHJ	畑宿
		鍛冶屋群	HNKJ	鍛冶屋
静岡	天城	上多賀群	HNKT	上多賀
		柏峠群	AGKT	柏峠
東京	神津島	恩馳島群	KZOB	恩馳島
		砂糠崎群	KZSN	砂糠崎
山陰	隠岐	久見崎群	OKHH	久見崎
		箕浦海岸群	OKMK	箕浦海岸
			OKKH	岸浜
九州	大分	姫島	OOHM	姫島

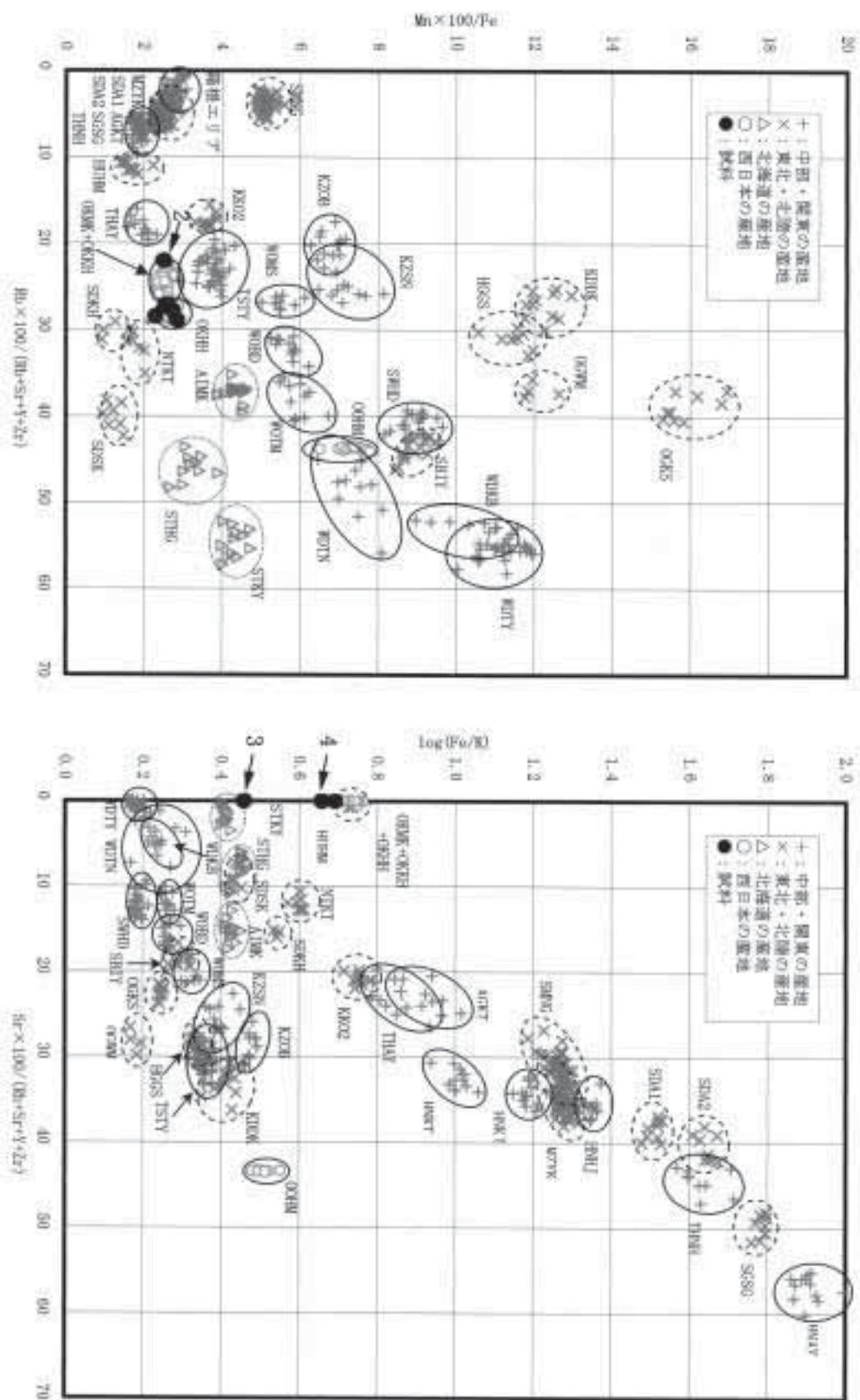


図159 黒曜石の産地判別図（試料は黒丸で示す）

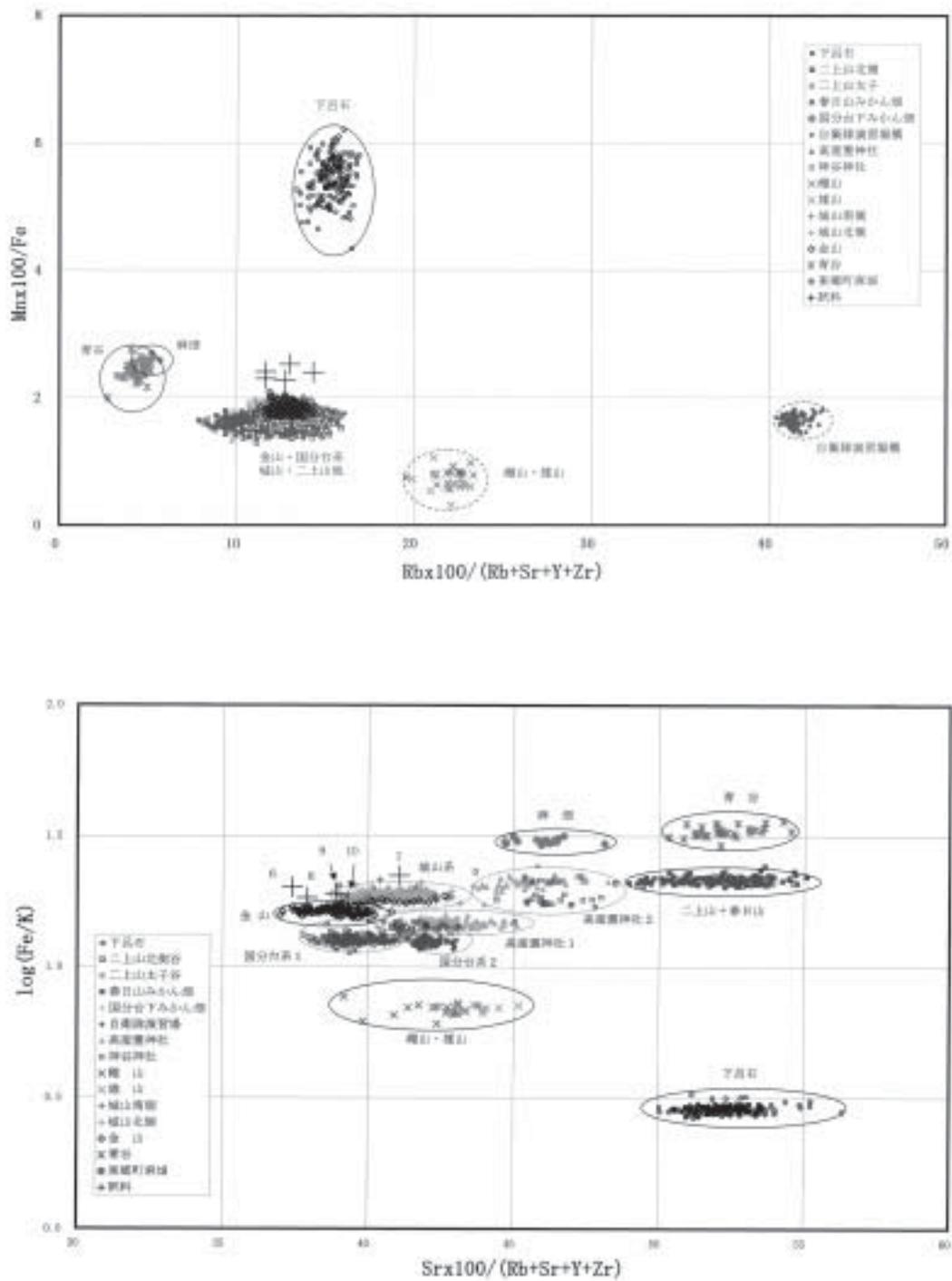


図160 サヌカイト・ガラス質安山岩の産地判別図（試料は+で示す）

## 第7節 縄文時代早期末・前期初頭の土器と石器について

本調査では多量の縄文時代遺物の出土を見た。大半が包含層出土のため資料的な制約があるものの、その量と質は周辺地域の中では群を抜いている。本節では、これらの遺物のうち最も充実した内容をもつ早期末～前期初頭の土器と、極めて多量の出土を見た石器類について検討し、関連遺跡との比較を行うことで、縄文時代早期末～前期初頭における名和飛田遺跡の特質を考えてみたい。

### 早期末・前期初頭土器の編年的位置

#### 1. 名和飛田遺跡出土隆帯文土器群の様相

本調査で出土した早期末～前期初頭土器は、繊維混入の隆帯文土器群と、これに後続する西川津式土器がある。ここでは、資料の充実している前者について検討を行う。これらの隆帯文土器の特徴は先にふれた通りであるが、今一度その概要を示す。1. 胎土に繊維を混入することを基本とする。2. 口縁に隆帯を貼り付ける。口縁以外にも横走隆帯をもつものや、垂下隆帯をもつものもある。隆帯上には様々な工具の刺突や押し引きでキザミを施す。隆帯のないものも一定量存在する。3. 外面に縄文を施すものと、条痕を施すものの二者がある。内面はいずれも条痕ないしはナデで調整される。4. 器形はやや尖底気味の砲弾型を呈す。口縁は平口縁のものが多いが、波状口縁をなすものも一定量見られる。底部は丸底をなす。器種は深鉢のみで器形にもバラエティーが見られないものの、大きさには大小の別がある。以上の特徴をもつ土器群は井上智博氏に従えば「長山式」(井上1991・1996)に、小林青樹氏に従えば、縄文地のものの大半は「福呂式」、条痕地のものは「長山馬籠式」に当てはまると思われる(小林2000)(注1)。現在、これらの繊維混入の隆帯文土器は小林氏設定の2型式で捉える認識が一般化しつつあるようである(高橋2004、柳浦2001、矢野2002など)。しかし、報告でも触れたように両者は地文にこそ違いがあるものの、その他の特徴は極めて共通性が高く、型式として分離しうるか検討の余地が大きく残っていると思われる。したがって、まずは名和飛田遺跡出土資料から隆帯文土器の実態を捉え直してみたい。

#### 口縁・隆帯形態の分類と型式変化の方向性(図161)

口縁形態と口縁への隆帯の貼り付けのあり方が編年上の指標となることは早くから指摘され、型式学的な検討の結果、隆帯文土器から西川津式A類への連続的な変化が明らかにされている(中原1989、井上1991・1996)。こうした成果を踏まえて、名和飛田遺跡出土資料を、隆帯の形態と貼り付けのあり方および口縁部の形態から、次の8類に分類した(図161)。

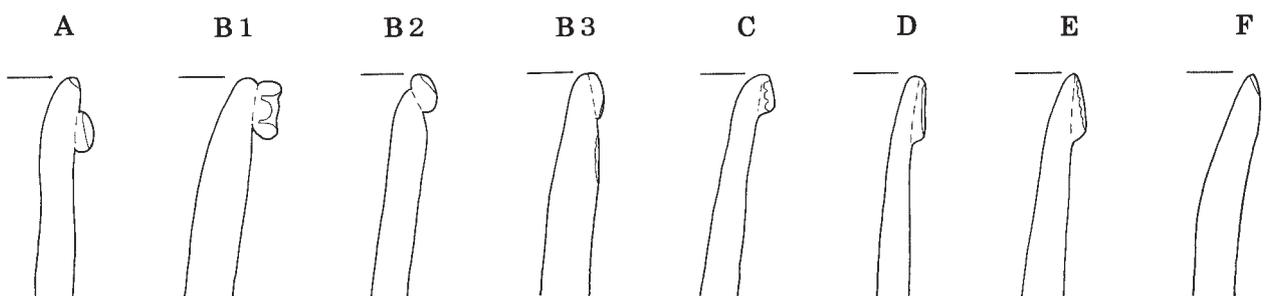


図161 口縁・隆帯形態の分類

A類：口縁端より下位に隆帯をもつもの。隆帯は断面丸形で、貼り付け面が小さいものが多い。

B類：口縁端に隆帯をもつもの。隆帯の形態からさらに3類に細分した。

B 1類：隆帯の断面形が丸みを帯び、貼り付け面が小さい。

B 2類：隆帯を口唇上に乗せるように貼り付ける。断面丸形で、貼り付け面が極めて小さい。

B 3類：隆帯がしっかりと押圧されて貼り付けられる。低くつぶれた隆帯となる。

C類：隆帯が口縁端部と一体化しているもの。隆帯貼り付け後に口縁端面と隆帯下端にナデが加えられており、隆帯の継ぎ目が見られない。隆帯外面にもナデを加え、面を形成するものもある。

D類：口縁端に幅広の隆帯を貼り付けて密着させ、口縁部肥厚帯とするもの。

E類：口縁端に隆帯を貼り付けた後に、口縁の面取りを行って、断面形を三角形に仕上げるもの。

F類：口縁部隆帯をもたないもの。隆帯文成立以前の無文口縁の系譜を引くものか、口縁部隆帯が省略された装飾度の低いものと考えられ、基本的に型式上の新旧は想定しない。

従来から想定されている隆帯の口縁部との一体化傾向という型式変化の方向性に準拠すれば（中原1989、井上1991）、A類 B類 C類 D・E類となるだろう。D類やE類は隆帯が肥厚帯へと変化し、西川津式A類で普遍的に見られる口縁形態と同じものとなっているので、これらが型式学的に新相を示すものと捉えうる。C類は口縁との一体化が明確に意識され、隆帯外面をナデ調整で面取りするものも見られることから、D・E類への連続性を追えるだろう。問題となるのはA類とB類が型式学的な前後関係を示すかどうかである。B類にはいくつかのバリエーションが認められるので、このなかから連続的な変化が起こっていると思われる。例えば、B 3類は隆帯の形態がB 1・2類と明らかに異なり、口縁との一体化も進んでいる。これがC類などに直接連続するかどうかは別にしても、型式学的に後出のもの可能性がある。他方、B 1・2類は隆帯の断面形や接面の状態がA類と共通する。また、A類の隆帯の位置は端部から比較的遠いものからB類に近いものまで幅があるので、貼り付けは臨機的に行われているようである。したがって、A類とB 1類との区別もさほど明確に意識されていなかったと思われる。両者は基本的には同一段階の土器で、隆帯の貼り付け位置に多様性があったと考えられるので、A類 B類という型式変化は考えない。以上を整理すると、A・B 1・B 2類 B 3類 C類 D・E類となる。この型式学的な変化の方向性が妥当かどうか、またこれが編年の指標となりうるかは、口縁・隆帯形態以外の特徴の分析とあわせて後に検討する。

隆帯文土器群の構成要素（表21）

隆帯文土器群はすでに述べたように地文や調整、口縁・隆帯形態や、隆帯上のキザミなどの土器を構成する諸要素に多様性が見られる。そこで本遺跡出土土器群に見られる諸属性を整理して、隆帯文土器の諸要素とその構成のされ方について分析を行う。特に、縄文地のものと条痕地のものを異なった型式として分離しうるかを検討の主眼とする（注2）。

まず土器器面に施された地文や調整の構成から見てみよう（表21-1）。外面の地文が縄文のものと条痕のものとの比率は、前者が30%、後者が70%となり、条痕地が主体となる。縄文原体はR L単節縄文が主体となるほか、L R単節縄文も一定量見られ、1点のみ無節縄文（ $\ell$ ）が存在する。条痕は内外面とも貝殻条痕が中心になるものの、植物質工具による条痕も多く見られ、施文方法にバラエティーが見られる。内外面で条痕工具が異なる個体も多く見られる。外面地文が縄文が条痕かに関わらず、内面調整には同じものが見られ、その構成の比率もほぼ同じである。

続いて先に分類した口縁・隆帯形態と外面調整の相関関係について見てみる（表21-2）。地文の

表21 名和飛田遺跡出土隆帯文土器の属性構成

1 器面調整

内面調整

	貝殻条痕	植物条痕	条痕	工具ナデ	ナデ	計
RL縄文	7	2	1	2	13	25
LR縄文	1	2	2		6	11
無節縄文		1				1
貝殻条痕	25	12	3	1	20	61
植物条痕	2	8	2	2	5	19
条痕	1	1			7	9
ナデ	6	4	1	3	24	38
縄文合計	8	5	3	2	19	37
条痕合計	28	21	5	3	32	89
計	42	30	9	8	75	164

外面調整

2 調整と口縁形態

口縁・隆帯の形態

	A	B1	B2	B3	C	D	E	F	計
RL縄文	4	8	3			1	4	4	24
LR縄文	1	4						2	7
無節縄文								1	1
貝殻条痕	8	15		2	2		1	9	37
植物条痕	2	5	2	2	3			1	15
条痕	2	3	1		1				7
ナデ	8	8	1	1	1		2	5	26
縄文合計	5	12	3			1	4	7	32
条痕合計	12	23	3	4	6		1	10	59
計	25	43	7	5	7	1	7	22	117

外面調整

3 調整と隆帯上キザミ

隆帯上キザミ

	半裁竹管	貝殻腹縁	貝殻圧痕	ヘラ	棒	装飾押圧	なし	計
RL縄文	3	6	3	4	3	2		21
LR縄文	2		1			2		5
貝殻条痕	1	17	3	5	1	2	4	33
植物条痕	3	5	2	5		1	1	17
条痕	3	4	2		1		1	11
ナデ	7	6		6	3	1	2	25
縄文合計	5	6	4	4	3	4		26
条痕合計	7	26	7	10	2	3	6	61
計	19	38	11	20	8	8	8	112

外面調整

4 口縁形態と隆帯上キザミ

口縁・隆帯の形態

	A	B1	B2	B3	C	D	E	計
半裁竹管	8(4)	6(1)						14(5)
貝殻腹縁	6(6)	12(3)	5	3	2	1	2	31(9)
貝殻圧痕	5(4)	4	1					10(4)
ヘラ	4(4)	6	1		4		4	19(4)
棒	2(1)	6(3)						8(4)
装飾押圧		6						6
なし		3		2	1			6
計	25(19)	43(7)	7	5	7	1	6	94(26)

隆帯上キザミ

\* ( )内の数字は口縁上端・口唇にもキザミが施されているもの内数

\* それぞれ図化したもののみ計数。遺存部位によって観察できる属性が異なるため、母数はすべて異なっている。

違いに関わらず、口縁・隆帯形態はB 1類が主体となり、次いでA類が多い。縄文地、条痕地とも、A類とB 1類の構成率がほぼ同じになる点は重要であろう。B 2類は縄文地、条痕地とも見られるが、B 3類、C類は条痕地しか見られない。D・E類は条痕地であれば基本的に西川津式A類として認識できるものであるが、これに縄文地のものが見られる点が注目される(注3)。隆帯をもたないF類は縄文地、条痕地ともに一定量存在する。このように、地文の違いと口縁・隆帯形態が相関するものはB 3・C・D・E類で、ほかは縄文地、条痕地とも、ほぼ同じ比率で構成されていることが指摘できる。

次に、隆帯上に施されるキザミ(押圧による加飾も含む)と他の属性との対応関係を見てみる(表21-3・4)。キザミには多くのバラエティーが見られるが、縄文地、条痕地とも同様のキザミが施されている。実際に個々の資料を見ていくと全く同じ加飾が行われているものが多数見られる。貝殻条痕地文のものは貝殻でキザミを施すものが非常に多い。一つの工具で複数の作業をこなそうとするのは製作形態としてはごく普通のあり方だろう。むしろ、他の工具で加飾を行うものが一定量見られることこそ、キザミの多様性をよく示しているとも捉えられる。なお、縄文地でも貝殻で加飾するものが最も多いので、キザミ工具は地文に関わらず貝殻を比較的多用する傾向にあったと言える。

口縁・隆帯形態とキザミの関係を見ると、A類とB 1類のキザミのパターンが共通することが注目される。また、この2類型には隆帯上だけでなく、口縁上端、口唇部にもキザミが施される点でも共通性が高い。これら以外の類型ではキザミのバリエーションがきわめて少なくなり、B 3・C・D・E類は装飾効果の低い貝殻腹縁やヘラによる線状のキザミのみしか見られない。

本遺跡の隆帯文土器の属性構成からは、縄文地、条痕地のものとも地文以外の属性は非常に共通性が高いことが確認される。したがって、縄文と条痕の違いも多様なあり方を示す器面調整のバリ

ーションと捉えることも可能ではないだろうか。これらの隆帯文土器群は、多様な要素が複合的に組み合わせられて成り立つひとつの構造体を成しており、これを複数の型式に分離するのは不可能と考える。

以上の分析から、小林氏設定の「福呂 式」は井上氏設定の「長山式」のバリエーションの中で理解したほうがよいと考えられる。そもそも「福呂 式」設定の基準資料となる福呂遺跡の土器は実質わずか3個体のみと資料的な制約が大きい。また、小林氏も触れているように「福呂 式」とされたものは非常に不安定で、「福呂 式」と西川津式土器が混在したものでしかない可能性が高く、氏の言う「長山馬籠式」を示す内容ではない。したがって、これと「福呂 式」を層位的関係と捉えて時期差を認定するのは困難と思われる。また、「福呂 式」認定の最大の基準は縄文地文主体という点にあるだろう。しかし、小林氏が「福呂 式」の前段階に「島大構内1次調査式」として型式設定した島根大学構内遺跡1次・11次調査（会下編1997・2002）出土の繊維土器群に条痕地のものが縄文地文のものと同量含まれていることを考えると、隆帯文土器群成立段階からすでに縄文地文と条痕地文が量的に拮抗する構成をなしていた可能性が高い。したがって、必ずしも縄文地文の隆帯文土器を積極的に別型式として分離する必要はないと考えられる。

#### 隆帯文土器の編年

以上の検討によって、これらの隆帯文土器群を複数の土器型式に分離して捉えることは不可能と考えたが、一土器型式内で時期的な段階差を認識できる可能性は残されている。もちろん地文ではこれを認識できない。指標となりうるのは先に検討した口縁・隆帯形態であろう。変化の方向性はA・B1・B2類 B3類 C類 D・E類と捉えたが、その他の属性の構成のされ方もこれを支持する。外面地文と口縁形態の対応で重要なのは、B3・C類に条痕地文のみしか存在しない点であろう。わずかに見られるD・E類は縄文地文のみが存在する（注4）。両類型は肥厚帯状を呈すことから、かなり新しい段階まで縄文地文が少数残ると評価しておく。このことから外面縄文地文の継続期間は長いと思われ、隆帯文土器の展開期間の全時期を通じて条痕文と共存する可能性が高い。キザミのあり方は、A・B1類とそれ以外で大きく異なる。B3・C・D・E類では、キザミ工具の集約化とキザミ形態の簡素化が見られる。これも型式学的な変化を示しているものと評価できよう。

以上のことから、A・B1・B2類が型式学的に古相を示し、B3・C・D・E類が新相を示すと考えられるので、これを基準に相対的な時期差が認識できるだろう。古相を示す一群を古段階、新相を示す一群を新段階とする。ただし、現状ではこれを裏付ける一括資料は皆無であるので、今後さらに検討が必要となる。

#### 2. 隆帯文土器群の土器型式構造

##### 関連遺跡との比較

名和飛田遺跡出土資料で確認できた隆帯文土器群の様相を他遺跡と比較し、その異同を見て行く。隆帯文土器群がまとまって出土している遺跡は少なく、ここでは福呂遺跡（野崎編2000）と長山馬籠遺跡（益田ほか1989）の2遺跡を比較対象とする。福呂遺跡は「福呂 群」の遺構内およびA地点遺物集中地点の土器を、長山馬籠遺跡は「Z 群」・「Z 群」の隆帯文土器を分析資料とする。外面地文と口縁・隆帯形態の構成率を遺跡ごとに示し、概要を把握してみる（図162）。福呂 群は、外面縄文地文が圧倒的主体を占める（口縁を含む個体は全て縄文地文）。名和飛田遺跡の地文は条痕が主体となる。新段階のB3・C・D・E類を除くと、若干縄文地文の組成率が上がり、縄文地文：条痕地

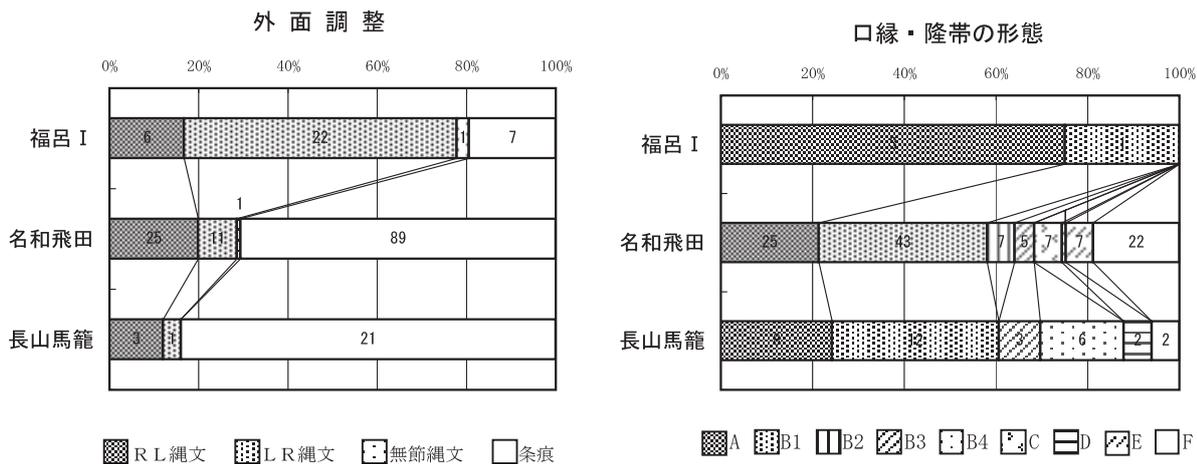


図162 隆帯文土器の特徴の比較

が1 : 2の割合となる。長山馬籠遺跡では縄文地のものが2割以下と少ない。ただし、A・B1類のみに限ると3割近くが縄文地となる。これらを比較すると福呂群の縄文地の割合が突出している点が注目される。縄文原体は福呂群ではLR単節縄文が主体となるが、名和飛田遺跡ではRL単節縄文のほうが多い。撚り方向は異なるが、福呂群、名和飛田遺跡とも縄文の節が大きく、撚りがやや緩く粗雑な印象を受ける点や、器面上に浅く施されるものが多い点で類似性が高い(注5)。

続いて口縁・隆帯形態の組成を見てみよう。福呂群では口縁部資料が少なく、組成を把握するのに十分でないが、A類とB1類で構成されることを確認できる。名和飛田遺跡、長山馬籠遺跡でもA類とB1類が主体となる。組成率は両遺跡ともB1類がやや多い。長山馬籠遺跡でB4類としたものは報告書中で「A2c類」と分類されたもので、名和飛田遺跡類型のB3類に貼り付けのあり方が近いので、新段階のものと考えられる。これを含め、長山馬籠遺跡では新段階のものが一定量構成されている。3遺跡ともA類とB1類が構成の主体となる点で共通する。そのほか、隆帯上キザミの形態は3遺跡ともほぼ共通し、各遺跡ともバラエティーに富む。口縁上端のキザミは福呂群では全ての資料に、長山馬籠遺跡でもA類の半数ほどに見られる。

### 隆帯文土器群の構造

3遺跡の各要素には共通性が高い部分が多い。しかし、名和飛田遺跡、長山馬籠遺跡と福呂群の差も見られる。口縁・隆帯形態から見ると、名和飛田遺跡、長山馬籠遺跡には新段階のものが少量ながら含まれているのに対し、福呂群は古段階のもののみで構成される。したがって、両遺跡は継続期間に差があったことが分かる。重要なのは、地文の構成に違いがみられることであろう。地文の大きな差は、名和飛田遺跡、長山馬籠遺跡の資料を古段階のもののみに限っても歴然と存在している。この違いを説明するには、遺跡のあり方自体を考える必要があるだろう。福呂遺跡と名和飛田遺跡や長山馬籠遺跡のあり方を比較した場合、最も重視すべき差は遺跡規模にある。名和飛田遺跡や長山馬籠遺跡は、出土遺物量などから推測して、規模が大きく、拠点的な遺跡と考えられるだろう(表23参照)。したがって、名和飛田遺跡や長山馬籠遺跡の土器群の地文のバリエーションは遺跡の拠点性と連動した現象の可能性がある。逆に、出土遺物の少ない福呂遺跡は非拠点的な小規模遺跡として捉えられる。このことが、地文が縄文に限られ、単相的な様相を示す要因となるのではないだろうか。

遺跡に残された遺物群は、社会集団が潜在的に保有する物質文化の構造が部分的に表出したもの

でしかない。その構造のどの程度の部分が発現し、またそれがどのような表現型をとるかは遺跡の置かれた文脈によって大きく異なる。限定的な文脈に置かれた遺跡では物質文化も限定的にしか表出しえない。すでに確認してきたように、隆帯文土器群は多様な要素が組み合わさって成立している。その要素の多くの部分が土器群に実体化して見られるのは、定着性が高く、幅広い活動が継続的に行われた拠点居住地においてであろう。それに対して、キャンプサイト的な小規模居住地では土器群の複合性の発現度は低くなると考えられる。

## 名和飛田遺跡出土石器群の石器製作技術と製作形態

### 1. 名和飛田遺跡出土石器群の石器製作技術

名和飛田遺跡では6000点を超える石器が出土した(表11~13)。特に黒曜石製石器やその製作に関わる残滓類が大量に含まれており、黒曜石を用いた石器製作のあり方を探る好資料といえる。しかし、これらの石器は縄文時代早期から弥生時代までの物が含まれていると思われ、厳密な帰属時期を決定できない。しかし、報告で示したように、第3調査地A・B・C区はほとんどが縄文時代に帰属するものと思われ、さらに、1. 出土土器の大半が早期末~前期初頭のものであること、2. 石器と早期末~前期初頭土器の分布傾向が似たあり方を示すこと、3. 石鏃の形態組成が早期~前期的であること(注6)、4. 石器に占める黒曜石の組成率が高いこと(注7)の4点からその多くが早期末~前期初頭に帰属するものと考えている。ここでは、A・B・C区出土石器の大半は早期末~前期初頭に帰属するものという前提で、これらを対象として石器製作のあり方を検討する。

礫石器類を除く打製石器製作には、黒曜石を中心に用いるほか、硬質安山岩が一定量見られ、わずかに頁岩も見られる(表22)。なお、蛍光X線分析によると、黒曜石は隠岐産(久見主体)、硬質安山岩はサヌカイトと見られ四国産との推定結果が得られている(第

表22 第3調査地A・B・C区出土石器組成表

器種 石材	石鏃	石鏃未製品	スクレイパー	石匙	楔形石器	楔形石器削片	石鏃	加工痕ある剥片	使用痕ある剥片	剥片	砕片	石核	ブランク	原石(小型)	計
黒曜石	83	13	48		123	2	1	43	30	2629	2197	61	19	1	5250
硬質安山岩	21	4	4	1	5		1	2		139	54	2			233
頁岩										1					1
計	104	17	52	1	128	2	2	45	30	2769	2251	63	19	1	5484

6章第6節参照)。ここでは量的に圧倒的主体を占め、製作の内容を把握できる黒曜石製石器の製作形態を検討する。

まず、石器製作技術を製作過程の順に見てみよう。剥片剥離技術には一定の規則性は見られない。石核は打面転移を頻繁に行うものが多く、定型的な剥片は作出されない。また、両極打法がしばしば剥片剥離に用いられる。楔形石器のなかには明らかに剥片剥離を目的とした石核として機能したものが含まれている。こうして得られた不定形剥片を器種に合わせて選択し、二次調整を行うようである。素材剥片は器種の大きさに見合えばよかったですようで、素材の用い方は非常に臨機的ないしは便宜的である。素材剥片剥離技術に明確な規格性がなく、素材獲得から器種製作にいたるまで連続的な計画性が見られないことから、組織立った石器製作体系を保有していないと言える。

以上の製作工程を石材消費過程に従って整理すると以下ようになる(図163)。まず、原石を粗割りし、分割礫を割り出す。あるいは原石を石核にして直接大型の素材剥片を作出する。本遺跡では、原石自体の出土がなく、大型の石核なども見られないので、基本的にはこの作業は行われてい

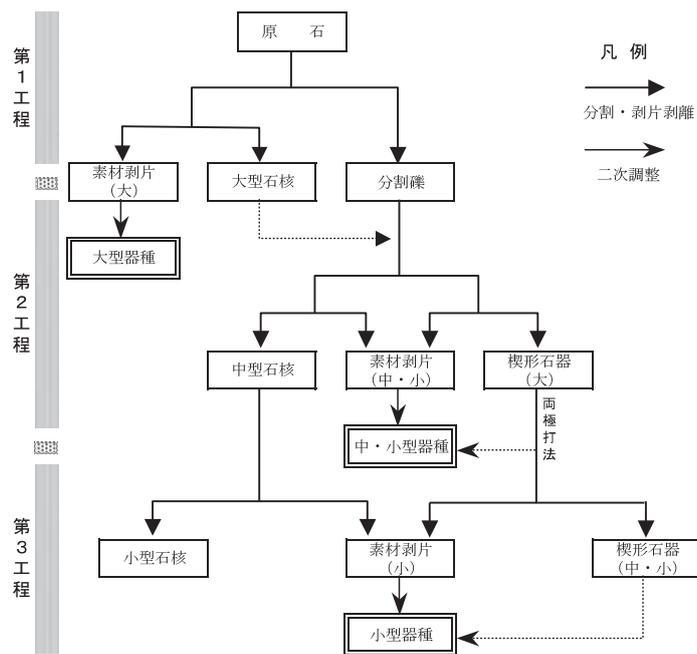


図163 石器製作工程模式図

なかったと思われる。続いて、これらの原材をもとに剥片剥離が行われる。この結果、中・小型の素材剥片が得られ、二次調整を加えて中型・小型スクレイパーや石鏃、楔形石器などが製作される。本遺跡ではこの段階を示す資料が多く残されている。分割礫が比較的多く出土しているので、この状態で遺跡内に搬入し、打ち割りを開始したと考えられる。また、大型の素材剥片の搬入も見られるので、多数出土している大型スクレイパーのある程度の部分は遺跡内で素材に二次調整を加えて製品とした可能性がある。さらに石材消費が進むと、石核や楔形石器は小型化し、石鏃などの小型器種の素材剥片しか作出し得なくなる。以上を

3つの工程段階として整理した(図163)(注8)。本遺跡では分割礫、大型素材剥片の形態で原材が搬入されて石器製作が行われているので、第2工程以降の製作過程が追える。

2. 早期末～前期初頭の石器製作形態

ここでは、周辺の早期末～前期初頭遺跡の製作形態を瞥見し、当該期の遺跡での石器製作形態の現れ方や石材の流通消費過程について予察する。また、これとあわせて、先の隆帯文土器の発現構造の仮説の前提となる遺跡間格差の存在を検証してみよう。

鳥取県中部から島根県宍道湖周辺にかけて所在する早期末～前期初頭(「島大学構内1次調査式」～西川津式)の主な遺跡を分析対象として取り上げた(表23)。いずれの遺跡とも、利用石材は隠岐産と考えられる黒曜石が圧倒的主体を占めており、基本的には名和飛田遺跡で推定した黒曜石製石器の製作技術と同じ過程を経て石器が製作されていたものと推定される。各遺跡の石器数を見て

表23 早期末～前期初頭遺跡の石器数と製作形態

遺跡名	石器数(礫石器以外)				主要器種点数			黒曜石組成率	遺跡内で行われる石器製作工程段階*	早期末～前期初頭の土器型式と土器点数*
	総数	器種	石核・原形	剥片・碎片	石鏃	スクレイパー	楔形石器			
西川津 (海崎地区・V区)	1309以上	216	10以上	1083以上	80	130	6	99%	第1工程以降?	西川津式主体:大量 (前後の型式少量含む)
名和飛田 (A・B・C区)	5484	381	83	5020	104	53	128	96%	第2工程以降	長山式～西川津式:3155点
長山馬籠	10261	452	80	9729	120	3	6	94%	第2工程以降	長山式～西川津式:約2400点
富繁渡り上り	2000以上	?	?	約2000	約20	約20	?	器種で100% (他もほぼ全て)	第2工程以降?	島大1次式～西川津式 大量
下山南通	323	31	6	286	30	0	0	89%	第3工程	菱根式～西川津式:868点 (+501点?)
目久美 (前期初頭層)	? (273*)	70	1	? (202*)	19	15	3	器種で87%	第3工程?	西川津式:約500点
島大構内橋繩手地区 1次・11次(5～8層)	40	9	8	23	1	4	0	98%	製作痕跡薄い (第3工程?)	島大1次式～西川津式 :266点
福呂 (未報告含む)	16	6	2	8	0	1	0	81%	製作痕跡薄い	長山式～西川津式 :約200点

\*目久美遺跡の石器総数は出土遺物分布図から計数し、そこから礫石器類の数を引いたもの。したがって、正確な出土総数とは限らない。  
 \*工程段階は遺跡内で主体となると想定した段階を示した。他の工程が客体的に行われている場合もある。正確な内容を把握できない遺跡が多いためあくまで概念的な想定。  
 \*土器型式は早期末～前期初頭ののもののみ抽出した。土器数はこの時期幅に含まれる土器の破片数のみを計数している。太字のものが主体となる型式を示す。

みると、遺跡間で出土数の大きな格差が見られる。西川津遺跡（岩橋2001、内田1989）、名和飛田遺跡、長山馬籠遺跡、富繁渡り上り遺跡（岩田1996）では千点単位の石器数が出土しているのに対し、下山南通遺跡（中原ほか1986）と目久美遺跡前期初頭層（小原1986）では2～3百点台、島根大学構内遺跡橋縄手地区5～8層や福呂遺跡ではわずかに数十点台の出土しか見られない。

石器組成の内容を詳しく見ると、出土点数の多い遺跡では石核やブランク類が多数出土しており、盛んな石器製作が行われていたことが分かる。剥片・碎片類は出土点数の多い遺跡で当然大量に見られるが、その他の遺跡にも一定量存在する。したがって、石器数が少ない遺跡でも、石器製作自体は行われていたことが分かる。ただし、出土量の格差からその内容が大きく異なっていたことは容易に想像できよう。実際、遺跡内で行われた石器製作がどのような内容であったのか、先に名和飛田遺跡出土資料から想定した石器製作の工程段階を適用して、遺跡内での製作形態を推定してみる。

名和飛田遺跡では第2工程以降の石器製作が行われている。西川津遺跡や長山馬籠遺跡、富繁渡り上り遺跡は、名和飛田遺跡と同等の出土量があり、石核などの組成も大きく変わらないので、石器製作の内容もほぼ同等と考えられる。西川津遺跡 区からは、帰属時期は不明ながら黒曜石原石が出土している。このことから、部分的に第1工程も行われていた可能性がある。ただし、製作が全て原石から開始されたにせよ石核・ブランク数や剥片・碎片数が少ないので（区）大半は第2工程以降の作業を中心としていたと考えておこう。また、西川津遺跡では大型のスクレイパーの出土数が非常に多い。これは、潤沢な素材供給の下にあったことを端的に示しているだろう。長山馬籠遺跡では比較的大きな石核が2点出土しているのも、第2工程以降の作業を認められる。富繁渡り上り遺跡も第2工程以降の作業が行われていた可能性が高いだろう。下山南通遺跡や目久美遺跡は出土数が少ないものの、一定量の残滓類が見られ、石核も確認できる。しかし、その量や石

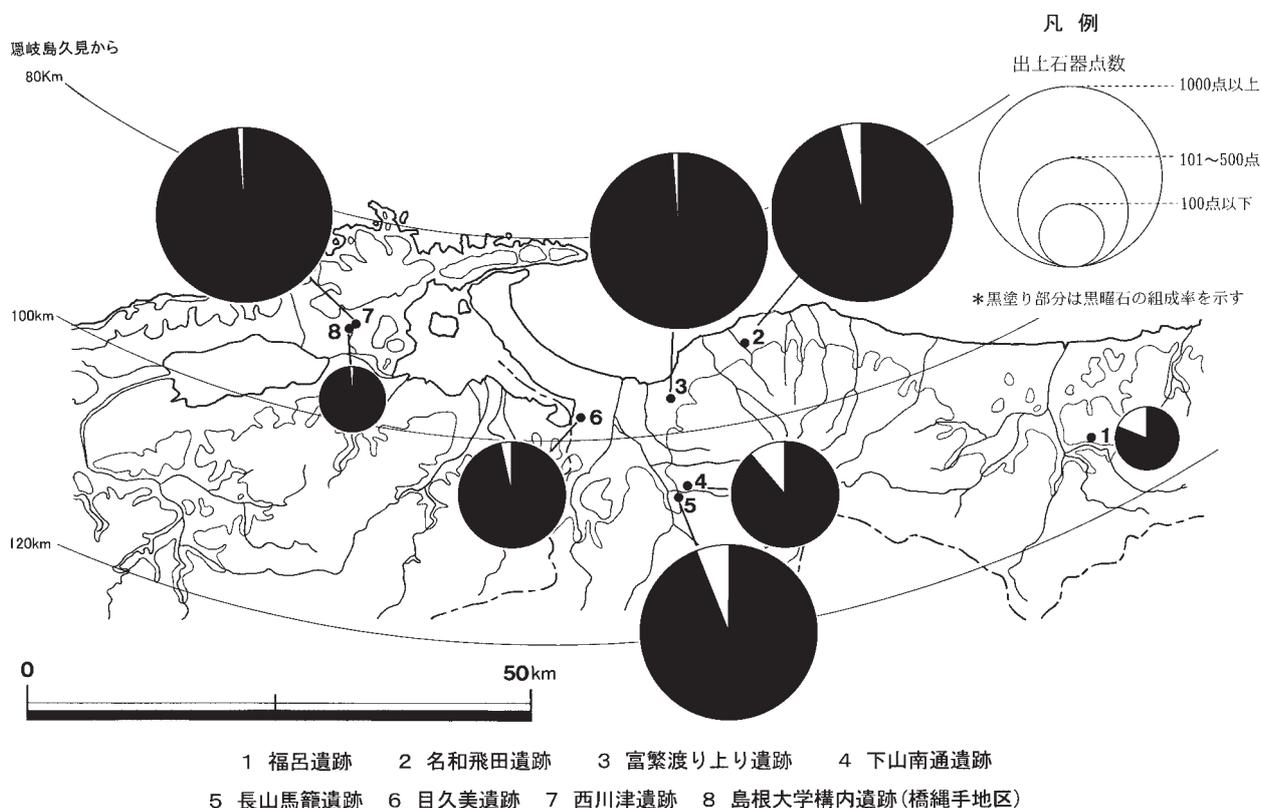


図164 石器製作の遺跡間格差

核の大きさからは、行われた作業はほぼ第3工程に限定されていたと思われる。島根大学構内遺跡橋縄手地区や福呂遺跡は極めて出土数が少なく、第3工程に相当する作業がわずかに行われていた程度であろう。

以上のように、遺跡間で行われる製作工程の内容が異なることが分かった。遺跡によって石器製作形態が異なり、大きな遺跡間格差が見られる(図164)。したがって、集中的な石器製作が行われ、製作の拠点となる遺跡が存在する一方、部分的な石器製作工程しか発現しない遺跡があるといえよう。遺跡の分布と石器量や石器製作工程の発現形態をあわせて見てみると、必ずしも黒曜石の入手に有利な沿岸部に大規模遺跡があるわけではないことが分かる。沿岸部でも石器出土量の少ない遺跡も見られる一方で、長山馬籠遺跡のように内陸部に大規模遺跡が見られる。また、至近距離にある遺跡でも石器製作形態が大きく異なる場合がある(図164)。こうしたことから、石器製作にみられる遺跡間格差は、居住形態の差と対応した可能性が高いだろう。土器の出土点数と石器製作の多寡が対応していることもこれを裏付ける。こうしたことから、石器製作は居住の継続性や定着性の高い拠点遺跡で集中的に行っていたと考えられる。拠点製作遺跡とそれ以外の遺跡の間には、石器製作・石材消費の連鎖が想定されるだろう。居住の拠点性と対応して石器製作形態が異なると考えるので、集団間で石材や石器が交換・交易されるのではなく、集団の居住形態のなかに製作・消費の連鎖が組み込まれていたと考えられる。拠点的な居住地で石器製作の大部分を行った後に、派生的な居住地にある程度の石材を持ち出し、そこでの活動の際に必要なに応じて部分的な石器製作を行う。この行動の繰り返しであったと考えている。もっとも、第1工程がはっきりと見られる遺跡がないことから、拠点遺跡がどのように素材を入手していたのかは明らかではない。石材流通のあり方にはなお不明点が多いものの、早期末～前期初頭に黒曜石の大量流入のピークが見られ、石材流通上の画期をなすことと(稲田1992)、石器製作の拠点化や、居住の定着性や継続性の高まりは連動した現象であった可能性が高い。

遺跡内での石器製作のあり方も重要な問題であるが、遺跡内で実際どのように石器製作が行われていたかを知る手がかりは非常に少ない。そうしたなかで、長山馬籠遺跡の例は重要であろう。ここで検出された2基の竪穴状遺構内からは、一括性の高い大量の石器が出土している。しかも、遺構ごとに石器製作の内容に差が見られ、一方で素材剥片剥離を行い、もう一方で調整作業を行って石器器種を仕上げていたと推定されている(瀧川1989)。集中的、集約的に特定の工程を行っていたと評価できよう(井上1992)。長山馬籠遺跡のあり方はある程度のまとまった期間のうちに特定の場所で集中的に石器製作が行われていた状況を示している。ほかの大規模遺跡でも、原材を入手して一連の製作工程を行っていく過程において、石材消費過程の運用管理や石器製作の集約化は自ずと必要となるだろう。一方の小規模遺跡はその製作の大半は必要に応じて便宜的、臨機的に行われるものであった可能性が高い。このように、拠点遺跡と非拠点遺跡では、単に石器製作量や発現する工程段階に格差があっただけでなく、遺跡における石器製作のあり方自体が異なっていたと思われる。

#### まとめと予察 - 早期末～前期初頭の歴史的位罫について -

土器と石器の検討から、縄文時代早期末～前期初頭には、遺跡のあり方に格差が見られ、特定遺跡の拠点化が起こっていると考えた。そして、このような拠点遺跡を定着性や継続性の高い集落と評価した。名和飛田遺跡もこうした拠点集落であった可能性が高い。これらの拠点遺跡では遺跡

内の活動に多様性と集約性が見られ、その内容が遺跡に残される土器や石器のあり方に現れている。このように、居住形態を反映して遺跡間格差が著しく顕在化するのが早期末～前期初頭の特徴といえるだろう。さらに言えば、こうした現象からは前代よりも定住化が進行した可能性が考えられる。定住化の問題と関連させつつ、早期末～前期初頭の歴史的特質についての予察をいくらか行い、まとめたい。

#### 定住化の進行と前期的土器群の成立

隆帯文土器群は多様な要素を統合してひとつの土器群に構成する複合性をもち、その複合性の発現の仕方が遺跡の定着性によって異なると考えた。こうしたあり方は後続する西川津式土器の「複合構造」の遺跡での現れ方（井上1991・1996）に一見類似する。しかし、西川津式土器の複合構造のように系列差を含んで成立しているものと、隆帯文土器群の構造は大きく異なる。隆帯文土器群の構造性とは個別の要素の組み合わせでしかなく、西川津式土器などに比べると製作技術上の諸要素に留まっているとも言える。また、西川津式土器は器形の多様化や装飾性の高まりが著しく見られる。それまでの土器群と根本的に違った構造をもち、これを生み出した社会は定住化が進んでいたと想定するのに十分な内容をもつ。隆帯文土器群は、器種は深鉢に限られ、器形にも大きな違いはない。あくまで早期的土器の流れの中に位置し、それを逸脱しないと言える。西川津式土器の出現はこれを崩壊させ、前期的土器群を成立させる。その過程に立ち会った隆帯文土器群が、部分的ではあっても、西川津式土器に先駆けて複雑性や複合性を兼ね備えていたことを評価しなければならない。なぜならば、こうした複雑性や複合性を発現させた居住形態の定着性の高まりこそが、前期的土器群の成立と展開を準備したと考えられるからである。また、こうした土器変化に大きく関わったと考えられる異系統土器の流入と複合化（小林2000）も、居住の定着性の高さ結びつく現象と考えられる。このように、早期末から前期初頭かけての土器変化は定住化の進行と密接に結びついたものであったと言えよう。

#### 定住化と労働形態

石器製作のあり方は、具体的な居住形態を明らかにする上で非常に重要な知見を与えてくれる。拠点居住地では石器製作が集中的に行われていたと考えたが、石器製作というひとつの部門のみならず、その他の労働にも集約化が見られたに違いない。拠点居住地での定住性の高さは労働の集約性を生み出す契機となる。逆に、拠点居住地での定住性は集約的な労働なしでは維持できないとも言える。こうしたあり方が、いつから始まったのか、前後の時期を含め検討しなければならないが、少なくとも早期末～前期初頭には定住化が一定まで到達したと思われる。また、この時期には低湿地をはじめとする平野部へと遺跡が進出し、多面性指向の資源利用が著しく進展したと考えられる。こうした生業活動の多角化と拠点集落での労働の集約化はこの時期の経済構造の根幹をなすものであろう。こうした経済構造は定住化によって生じ、同時に、定住化を進展させる原動力となったと考えられるだろう。

（北 浩明）

本稿をなすにあたり、次の方々には資料の実見の便宜を図っていただいたほか、様々なご教示をいただいた。山本悦世氏・野崎貴博氏・光本順氏（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）、岩田文章氏（淀江町教育委員会）、稲田陽介氏（島根県埋蔵文化財センター）。特に稲田氏からは資料に関して多くの教示を受けたほか、筆者のつたない議論に付き合っていた。未筆ながら記して感謝いたします。

## 第6章 特論

- 注1) : ただし、この理解が小林氏の意図に沿ったものであるかは、氏の記述を読む限りでは判然としない部分がある。小林氏は遺跡出土土器群単位で型式を設定しているため、長山馬籠遺跡出土の縄文地隆帯土器も「長山馬籠式」と捉えている。これに従えば本遺跡出土土器群も同様に、縄文地も含めて「長山馬籠式」の範疇で捉えうるのかもしれない。他遺跡で「福呂式」の型式認定がなされていないので福呂遺跡出土のわずかな土器のみから型式内容を理解するしかないが、これらと本遺跡出土縄文地隆帯土器の特徴は極めて近いと判断した。
- 注2) : 分析資料は報告中に図示した隆帯土器のみである(図12・85・87~89・95・108~114)。これらは確実に隆帯土器と認定でき、分析対象に西川津式などが含まれることはない。また、口縁部片は出土した資料のほとんどを図示しているので、資料上のバイアスは考えなくてよいと思われる。
- 注3) : これを敷衍すれば、この口縁形態の条痕地のものをすべて西川津式とは捉えられないということになる。
- 注4) : D・E類の条痕地隆帯土器は西川津式とした可能性が高いので、ここでは縄文地しか抽出できていない。
- 注5) : 節が整った長方形でかなり深く施文される点で他のものと雰囲気が異なるLR単節縄文が両遺跡で見られるが(福呂: 図12-1、名和飛田: 図109-516・517)、これもよく類似している。
- 注6) : 早期~前期には深い抉りの凹基式が主体となることが明らかにされている(会下2002、濱1999)。
- 注7) : 早期末~前期初頭に黒曜石搬入量のピークがあることが指摘されており、当該期には遺跡での石材構成が圧倒的に黒曜石に偏ることが確認されている(福田1992、会下2002、竹広2000・2003、濱1999)。
- 注8) : ただし、本遺跡出土の石器群は体系的な石器製作工程をもたないため、ここで設定した工程段階は石材消費の段階を整理するための便宜的なものに留まり、実体的な内容をもたない。

### 【引用参考文献】

- 稲田孝司1992「狩りと採集に生きた人々」稲田・八木編『新版古代の日本』第4巻 中国・四国 角川書店
- 井上智博1991「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相」『考古学研究』38-2 考古学研究会
- 井上智博1992「縄文時代における石器の集中製作について」『大阪文化財研究』3 大阪文化財センター
- 井上智博1996「山陰西川津式土器の土器型式構造と恩原2遺跡土器群の占める位置」『恩原2遺跡』 恩原遺跡発掘調査団
- 岩田文章1996「鳥取県淀江町・富繁渡り上り遺跡」『第7回中四国縄文研究会発表資料』 中四国縄文研究会
- 岩橋孝典2001『西川津遺跡』 鳥根県教育委員会
- 内田律雄1987『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書(海崎地区)』 鳥根県教育委員会
- 会下和宏編1997『鳥根大学構内遺跡第1次調査(橋縄手地区1)』 鳥根大学埋蔵文化財調査研究センター
- 会下和宏編2002『鳥根大学構内遺跡第11次調査(橋縄手地区2)』 鳥根大学埋蔵文化財調査研究センター
- 会下和宏2002「山陰地域における縄文~弥生時代の打製石鏃について」『鳥根大学構内遺跡第11次調査(橋縄手地区)2』 鳥根大学埋蔵文化財調査研究センター
- 小林青樹2000「縄文時代早期末葉から前期前葉土器群に関する問題」『福呂遺跡1』 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 小原貴樹1986『目久美遺跡』 米子市教育委員会
- 高橋信武2004「西川津式土器と轟式土器の関係」『山下秀樹氏追悼考古論集』 山下秀樹氏追悼論文集刊行会
- 瀧川友子1989「石器について」『長山馬籠遺跡』 溝口町教育委員会
- 竹広文明2000「山陰における石器石材利用をめぐる二、三の問題」『鳥根考古学会誌』第17集 鳥根考古学会
- 竹広文明2003『サヌカイトと先史社会』 溪水社
- 中原斉1989「長山馬籠遺跡出土早・前期縄文土器の編年的位置づけ」『長山馬籠遺跡』 溝口町教育委員会
- 中原斉編1986『下山南通遺跡』 鳥取県教育文化財団調査報告書21 (財)鳥取県教育文化財団
- 野崎貴博編2000『福呂遺跡1』 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 濱隆造1999「米子平野周辺における縄文時代の石器利用について」『古市遺跡群 古市カハラケ田遺跡・古市河原田遺跡』 鳥取県教育文化財団調査報告書59 (財)鳥取県教育文化財団
- 益田晃・中原斉・瀧川友子1989『長山馬籠遺跡』 溝口町教育委員会
- 柳浦俊一2001「山陰地方における縄文前期土器の地域編年」『鳥根考古学会誌』第18集 鳥根考古学会
- 矢野健一2002「中国地方における縄文時代早期末前期初頭の土器編年」『環瀬戸内海の考古学-平井勝氏追悼論文集-』上巻 古代吉備研究会

## 第8節 名和飛田遺跡出土の彩色記号をもつ須恵器について

### 1. はじめに

今回、名和飛田遺跡では古墳時代後期の竪穴住居2・3から計4点の、赤色顔料で「彩色記号」を施している須恵器が出土した。これまでの研究では、「朱書記号」・「漆書記号」(谷本1995)、「朱記号」(北野1994)と呼称され、兵庫県北部の古墳と、大阪府南部・河内地域の製鉄関連遺跡においてまとまった出土数が報告されている。ここでは谷本氏の用語を採用し、漆書きのものと朱書きのものを総括して「彩色記号」と称し、漆を使っているものを「漆書き」、漆以外の赤色顔料を使用しているものを広義の意味を持って「朱書き」と定義したい。

彩色記号をもつ須恵器の最初の報告は、島根県隠岐島の東笠根1号古墳の例(勝部1980)である。その後、兵庫県北部の古墳、大阪府のおおがた大県遺跡で報告されてきた。近年では、福井県・滋賀県・三重県でも彩色記号をもつ須恵器の報告がされ、分布範囲が広がってきている。鳥取県内では県内最西部に位置する米子市のせきしよ石州府古墳群と、中部のゆりはま湯梨浜町長瀬高浜遺跡での2遺跡のみが知られているのみである。今回報告する名和飛田遺跡は鳥取県の西部でも中部に近い場所で、但馬地域の古墳と石州府古墳群との間の希薄な出土例を埋めるものである。また、彩色記号とヘラ記号の関連性を指摘する意見もあるが、ヘラ記号は焼成前につけられているものがほとんどで、一般的には窯もしくは製造者の印として認識されている。一方、彩色記号は消費地に渡ってからつけられている可能性が高い事から、ヘラ記号とは別のものと考えたほうがいいであろう(北野1994)。

### 2. 地域の様相

現在報告されている彩色記号をもつ土器が出土している遺跡は、名和飛田遺跡を入れると38遺跡である( )(図165、表24)。これらの遺跡は分布や時期、漆書きか朱書きかの違いによって大別できる(谷本1995)。ここでは下記のように地域をA～D、時期を～の段階に大別してみた。

地域	段階
A. 日本海側(鳥取県・島根県・ 兵庫県北部・京都府北部)	. 6世紀前葉～6世紀後葉 . 6世紀末～7世紀前葉
B. 近畿西(兵庫県南部)	. 7世紀後葉以降
C. 近畿(大阪府南東部・奈良県・滋賀県)	
D. その他(福井県・三重県)	

地域ごとの特徴は、A地域とB地域北部には漆書きのものが多く、他の地域には朱書きしか見られないことである。段階ごとの特徴として、段階は鉄生産遺跡もしくはごく少数の古墳が含まれ、朱書きのものしか存在していない。段階には古墳が多くを占め、段階の遺跡の多くは、首里長の館と想定されている遺構が検出されている遺跡や、律令的祭祀色の濃い木製祭祀具などが出土している遺跡であるという点を指摘できるであろう。以下に、各地域ごとの様相を簡単にまとめてみる。

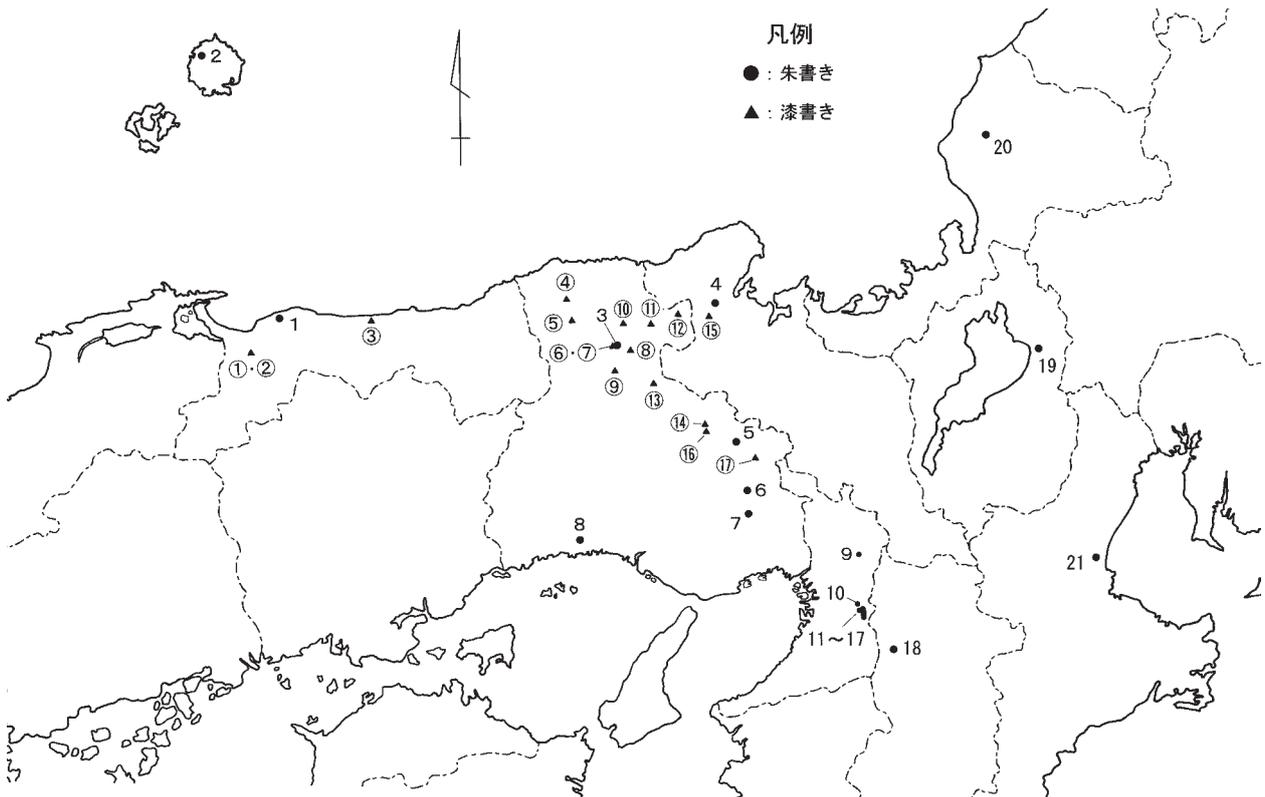


図165 彩色記号土器出土遺跡分布図

A地域では、段階のものは小山4号墳1基のみで、段階に属する但馬地方を中心とする古墳と、段階の遺跡がほとんどである。段階に属する古墳は、B～D地域の4基を含め、計5基だけであり、地域的にはまとまりを持たないが、全て朱記号である。但馬地方の古墳である文堂古墳は、段階に属するもので、多くの彩色記号を持つ須恵器のほかに金銅製の馬具や大刀などの副葬品が出土していることで知られている。このことからこの地域での首長墓であると考えられている。但馬地方から距離を置いて西に位置する鳥取県米子市の石州府古墳群からは、計51個という多量な彩色記号をもつ須恵器が出土している。特にこれらが出土しているのは、古墳群の中でも規模が大きいものや、馬具などの高い階層性を示す副葬品をもつものが多い。以上の事から、ごく限られた階層の人物のみの葬送儀礼で使われていた事が考えられるだろう。しかし、なかには東家ノ上3号墳のような小規模な古墳もいくつか含まれる事から、被葬者の階層には大きく関係しないという見解もある(谷本1988)。段階の遺跡が但馬地方に多いのも特徴である。但馬地方とその周辺地域は、律令時代に入ると漆を貢納するようになる。この地域で漆書きが多いのは漆が入手しやすかったからかもしれない。

B地域では、段階の古墳2基と、段階の古墳1基、残りは段階に属する遺跡である。古墳から出土のものは朱書き、その他のものは漆書きである。古墳と集落遺跡の割合も、朱書きと漆書きの割合もほぼ同率である。段階に属する箱塚4号墳は、箱塚古墳群の盟主墳であり、A地域と同様の特徴を示す。箱塚4号墳と墓山古墳は彩色記号をもつ須恵器を伴う古墳としては古相になるため、後述のC地域との関連も考えられるだろう。

C地域では、～各段階が存在し、A地域とはやや異なった様相を示している。段階に属する大阪府柏原市の大泉遺跡は、現在のところ彩色記号土器出土遺跡の中では最古になるものである。

表24 彩色記号土器出土遺跡一覧

朱書き	遺跡名	遺跡の性格	段階	地域	所在地
1	名和飛田遺跡	集落	II (6c末)	A	鳥取県西伯郡名和町名和字飛田
2	東笠根1号墳	古墳	II (6c末)	A	島根県隠岐島後の五箇村北方
3	小山4号墳	古墳	I (6c前)	A	兵庫県養父市八鹿町小山字東家の上
4	入谷古墳群	古墳	II (6c後)	A	京都府与謝郡加悦町字明石小字入谷
5	箱塚古墳群 4号墳	古墳	I (6c中)	B	兵庫県篠山市西紀町小坂字箱塚
6	前ノ谷古墳	古墳	II (6c末)	B	兵庫県三田市青野字前ノ谷
7	墓山古墳	古墳	I (6c前)	B	兵庫県三田市横山町1545
8	丁・柳ヶ瀬遺跡	集落	III (8c前)	B	兵庫県姫路市勝原区丁
9	讃良郡条里遺跡	集落	II (6c末)	C	大阪府寝屋川市出雲町
10	志紀遺跡	集落	II (6c末)	C	大阪府八尾市志紀町
11	船橋遺跡	表採	II (6c末)	C	大阪府柏原市古町、大正
12	平尾山古墳群 平野・大県支群90-3次調査	古墳	I (6c前)	C	大阪府柏原市平野、大県、太平寺
13	大県遺跡	集落	I (6c前～後)	C	大阪府柏原市大県、平野
14	大県南遺跡84-3次調査	集落	II (6c後)	C	大阪府柏原市大県4丁目
15	太平寺遺跡	集落	II (7c前)	C	大阪府柏原市太平寺
16	高井田遺跡89-3次調査区	集落	II (7c前)	C	大阪府柏原市安堂町、高井田
17	高井田横穴 90-2次調査 第4支群44号墳	古墳	II (6c後)	C	大阪府柏原市高井田
18	寺口忍海古墳群	古墳	II (7c前)	C	奈良県葛城市新庄町平岡
19	大戌亥遺跡	集落	II (6c末)	C	滋賀県長浜市大戌亥町
20	小羽山八号墳	古墳	I (6c前)	D	福井県丹生郡清水町小羽
21	小屋城1号墳	古墳	II (7c前)	D	三重県安芸郡安濃町南神山

漆書き	遺跡名	遺跡の性格	段階	地域	所在地
①	石州府古墳寺處支群	古墳	II (6c末～7c前)	A	鳥取県米子市石州府字寺處
②	石州府第4遺跡	集落	III (7c後)	A	鳥取県米子市石州府
③	長瀬高浜遺跡	古墳	II (7c前)	A	鳥取県東伯郡湯梨浜町長瀬字高浜
④	知見1号墳	古墳	III (7c後)	A	兵庫県美方郡村岡町長瀬字知見
⑤	文堂古墳	古墳	II (7c前)	A	兵庫県美方郡村岡町寺河内
⑥	西家ノ上2号墳	古墳	II (7c初)	A	兵庫県養父市八鹿町小山西家の上
⑦	東家ノ上3号墳	古墳	II (7c中)	A	兵庫県養父市八鹿町小山東家の上
⑧	穴ヶ谷西11号墳	古墳	II (7c前)	A	兵庫県養父市養父町大藪字穴ヶ谷
⑨	森地区の古墳	古墳	II (7c前)	A	兵庫県養父市養父町森
⑩	深田遺跡(※緑釉陶器)	集落	III (9c～10c)	A	兵庫県城崎郡日高町水上・松岡
⑪	砂入遺跡	集落	III (9c前)	A	兵庫県出石郡出石町袴狹持アミ
⑫	畑山遺跡	表採	III (7c後)	A	兵庫県出石郡但東町畑山
⑬	三保土戸遺跡	表採	III (8c中)	A	兵庫県朝来郡山東町三保字土戸
⑭	七日市遺跡	集落	III (8c中)	A	兵庫県水上郡春日町七日市
⑮	滝岡田古墳	古墳	II (6c末)	A	京都府与謝郡加悦町字滝小字岡田
⑯	山垣遺跡	集落	III (7c後)	B	兵庫県丹波市春日町棚原字山垣
⑰	下小西坪遺跡	集落	III (8c)	B	兵庫県篠山市篠山町西浜谷字下小西坪

この遺跡は製鉄遺跡であり、韓式土器とされる土器の出土から、製鉄技術をもった渡来系氏族の集落と考えられている。同時期に属す、平尾山古墳群は、大県遺跡とは近接しており、副葬品の中に鉄滓が含まれる事から、関連が強いと考えられている。段階に属する奈良県葛城市の寺口忍海古墳群では多種多様な副葬品が出土していることで知られる。そのため、副葬品の組成は、被葬者の出自や職掌を反映していると考えられている。彩色記号をもつ須恵器が出土している古墳では鉄滓を伴うことから、鉄生産に関わりのある人物のものだと考えられている。大県遺跡から距離的にも近い事もあり、ここでの彩色記号をもつ須恵器は大県遺跡と同様の性格を持っているとも考えられるだろう。この地域では朱書きのものしか見つかっていない。

D地域には主な出土分布域から外れる、福井県小羽山古墳と三重県小屋城古墳の2遺跡をまとめ

た。共に朱書きである。この地域の中では他に出土例がないことから、彩色記号が施されている須恵器が集中して出土しているA～C地域との交流があったとも考えられる。また、福井県の小羽山古墳は 段階に属する事から、早くから他地域との交流があったとも考えられるだろう。

### 3. 名和飛田遺跡出土例

今回名和飛田遺跡で出土した彩色記号をもつ須恵器は、竪穴住居2から杯身1点(112)、竪穴住居3からは杯蓋2点(123・144)・杯身1点(156)の計4点が出土している。いずれも出雲編年4期、TK209型式併行で、6世紀末のものであるので、上記分類ではA地域 段階に分類できる。

竪穴住居2出土の112は床面直上の粘土の上から検出されている。この竪穴住居は上面が大きく削平されているため、出土遺物は原位置を保っていない可能性がある。この粘土が構築材の一部のものだとすると、解体してからこの土器が廃棄された可能性がある。

竪穴住居3出土のものは杯蓋123が上層から、杯蓋144が下層から、杯身156は床面直上から正位で出土している。中央ピット上面からは、平根式の鉄鏝2本が出土している。鉄鏝が竪穴住居から出土するのは一般的ではなく、彩色記号をもつ須恵器とともに、古墳の副葬品として見られる組み合わせである。杯身156については、赤色顔料の分析を行い、酸化第二鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)という結果を得た(第6章第1節参照)。いわゆるベンガラであろう。他の3点も同様にベンガラと考えられる。

竪穴住居2・3は出土遺物から、ほぼ同時期に存在していた可能性があり、廃絶の形態も類似する事から、同時期もしくはほとんど時間差をおかずに廃絶が行われたと考えられる。

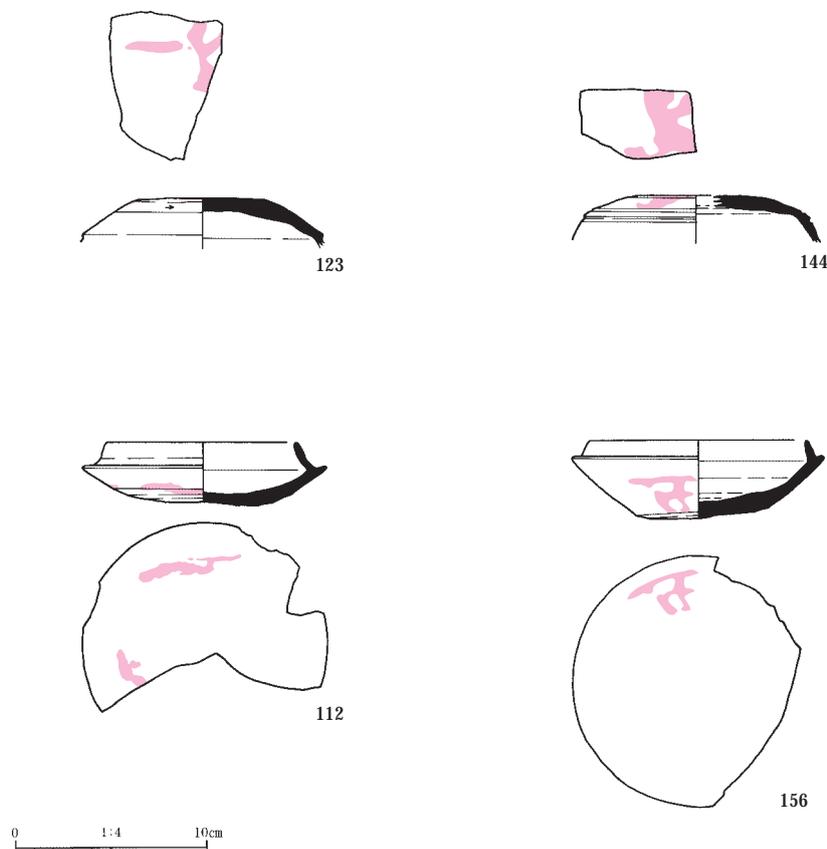


図166 名和飛田遺跡出土彩色記号須恵器

他遺跡でみられる彩色記号土器の性格と遺物の出土状況から、名和飛田遺跡の竪穴住居2・3では廃絶の際に祭祀が行われたと考えている。また、竪穴住居3は鉄鏝を伴うことから、竪穴住居の廃絶祭祀としても特異性を見ることができであろう。彩色記号土器出土38遺跡中には、竪穴住居内からの出土例はなく、先に述べたような、A地域・段階の特徴にもあてはまらないことから、名和飛田遺跡では、住居廃絶の際に行われたまつりの形態を考える上で興味深い事例を得る事ができた。

#### 4. まとめ

6世紀前半の彩色を持つ須恵器が見られる古相の遺跡では、大阪府の大泉遺跡がある。この遺跡では渡来系氏族により鉄生産が早くから行われていた事が推定されている。このことから、製鉄との結びつきが考えられるだろう(北野1994)。

6世紀～7世紀は各地に鉄・鉄器生産が急速に広まり、定着していく。そして、各地域の有力氏族が鉄を掌握していくと考えられている。そのため、製鉄技術と共に彩色記号を記すことも周辺地域に伝播した可能性も考えられるであろう。名和飛田遺跡の周辺では同時期の製鉄遺跡はまだ見つかっていないが、周辺には鉄滓などの製鉄関連遺物が出土している遺跡も多く、周辺に当該期の製鉄遺跡の存在を十分に考えることができるであろう。今後、製鉄遺跡が確認できれば、名和飛田遺跡での彩色記号須恵器の位置づけを再検討できる可能性もあるだろう。しかし、製鉄技術が伝播した地域でも、彩色記号をもつ土器が見つからない地域が多くあり、それらを短絡的に結び付けてしまうのは、拙速かもしれない。

鳥取県内の、同時期の集落内での祭祀は、倉吉市の谷畑遺跡が有名である。ここからは多量の土製模造品やミニチュア土器が出土している。このような土製品などが、生活の場における祭祀に使用される事が多いものだと考えるならば、名和飛田遺跡のような例は、集落内で行われた祭祀としては特異なものといえるであろう。竪穴住居自体も大型である事から、竪穴住居そのものの性格も考えなければいけないであろう。

古墳時代末期以降、西日本では竪穴住居の規模は縮小されていき、7世紀後半～8世紀には、掘立柱建物が住居の主流を占めるようになる。このような住居形態の変化が進むなか、名和飛田遺跡では大型の竪穴住居が建てられている。また、ほとんど時間差をおかず、大型のものや、特異な形態をもつ掘立柱建物が建てられている。この事から、このような形態の掘立柱建物をいち早く導入するだけの階層の居住集団の存在が考えられ、当地域での中核となる集落であった可能性が指摘できるであろう。

これまで述べてきたように、彩色記号をもつ須恵器は、階層性の高い古墳から出土していることが多い。名和飛田遺跡でも竪穴住居や掘立柱建物の規模・形態から、階層性の高い居住集団の存在が考えられるという点からも、これらの古墳と類似性をみることができであろう。このように、階層性の高さからも名和飛田遺跡の事例は古墳祭祀的な性格が強いものだと考えられるだろう。名和飛田遺跡が製鉄遺跡には関連しないことを考えると、出土した彩色記号をもつ須恵器も古墳から出土しているものと同じような性格をもつものだと考えたい。古墳時代末期の集落と古墳の関わりをうかがえる事のできる名和飛田遺跡での祭祀のあり方は、この時代のまつりの形態を考える上で興味深い事例となった。

(三木雅子)

## 第6章 特論

### <引用参考文献>

- 岡崎 正雄編 1993 『箱塚古墳群 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(XX )』兵庫県文化財調査報告書第127冊 兵庫県教育委員会
- 柏原市教育委員会 1985 『大県・大県南遺跡 - 下水道管渠埋設工事に伴う - 』柏原市文化財概報1984 -
- 柏原市教育委員会 1988 『大県遺跡 - 堅下小学校屋内運動場に伴う - 』柏原市文化財概報1988 -
- 勝部 昭 1980 「+印のある土器」『古代学研究』94
- 北野 重 1990 「記号を持つ土器の意義について」『柏原市歴史資料館報創刊号』
- 北野 重 1994 「朱記号を持つ須恵器」『韓式系土器研究』
- 小原 貴樹ほか 1989 『石州府古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会・石州府古墳群発掘調査団
- 谷本 進 1985 「漆記号を施した須恵器について」『但馬考古』第2集
- 谷本 進 1995 「朱記号と漆記号の展開」『但馬考古』第9集
- 谷本 進 1988 「赤色顔料・漆記号を施した須恵器と鎮魂儀礼」『但馬考古』第5集
- 谷本 進編 1992 『西家の上古墳群』兵庫県八鹿町文化財調査報告書第10集 八鹿町教育委員会
- 鳥取県教育文化財団 1983 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』鳥取県教育文化財団報告書12
- 古川 登 1995 「顔色あるいは塗料による彩色記号のある須恵器について」『岐阜史学89号』1995
- 吉識 雅仁ほか 1991 『深田遺跡・カナゲ田遺跡 - 日高バイパス建設に伴う但馬国府推定地内発掘調査報告書 - 』兵庫県文化財調査報告第99冊 兵庫県教育委員会

2005年2月段階のもの。谷本・北野・古川の各参考文献を集約、さらに追加したものの総数。

なお松江市袋尻3号横穴墓において、蓋杯に「×」状の赤色顔料がついたものが報告されている。

松江市筆ノ尾横穴墓群にも事例がある。これらを入れると40遺跡になる。

## 第9節 大型建物をもつ古墳時代後期の名和飛田集落について

今回の発掘調査で検出した遺構群からは、当地域における住居形態の変化・特殊な構造の掘立柱建物が存在するなど、これまで当地域では認められなかった資料を得たが、それらは多くの問題を含んでおり、検出した遺構群のあり方だけでは、不明な点も多い。そこで、先学の諸研究を踏まえ、周辺地域での調査例との比較を通し、古墳時代後期の名和飛田集落の素描を試みたい。

### 1. 検出した遺構群について

検出した竪穴住居は、周辺遺跡の古墳時代後期の一般的な住居と形態では大差ない。床面積は竪穴住居2が29.5㎡、住居3が36.4㎡である。本遺跡周辺遺跡の後期の住居には、名和中畝遺跡住居4（床面積16.6㎡）、門前第2遺跡菖蒲田地区住居10a（7.2㎡）・住居10c（39.4㎡）・住居11（23.9㎡）、茶畑第1遺跡住居18（21.2㎡）、古御堂笹尾山遺跡住居14基（住居34が9.0㎡で最小。住居19が40.5㎡で最大。平均21.4㎡）などがある。これらと比較すると、床面積を指標とした規模では、本遺跡の住居2棟は大型といえる。掘立柱建物1は本調査地では唯一全容がわかる建物跡である。軸はやや振るが南北棟の建物で、現況ではほぼ水平に見えるが、微地形では等高線に対し直交して建つ。前述のように、掘立柱建物1は梁行4間、桁行5間、床面積50.7㎡の規模である。規模では大型建物といえる。伯耆では由良遺跡の掘立柱建物2や同5などが、近い遺構で同等の規模を有する（原田1978）。掘立柱建物3は、身舎の梁行2間桁行3間以上の規模で、両桁行に柱穴列が伴う。掘立柱建物4は、後世の削平と調査地外に外れるため、全容は不明であるが、検出部分の柱配置から、梁行3間、桁行3間以上の規模を有する身舎に外周柱穴列を伴う建物である（第5章第3節pp. 64～65参照）。外周柱穴列は庇の他、縁束や軒支柱である可能性もあり、そのいずれであるか断定することは難しい。

### 2. 住居の変遷について

古墳時代後期の遺構群は少数で、調査地のごく狭い範囲に集中して検出された。同時期の遺構群は調査地外にも広がると考えられる。そのため、今回の調査地から集落の全容を知ることはできない。しかしながら、建物の方位はほぼ揃い、その配置も同時性を示唆する。竪穴住居2は掘立柱建物3に切られている。また、竪穴住居3は上屋構造を想定すると、隣接する掘立柱建物4とは同時併存しない。これらの遺構の出土遺物は、いずれも陶器編年TK209併行期（6世紀末から7世紀初頭）の須恵器を含む。これらの遺物に時期差を読み取るのは難しいが、掘立柱建物1からは同TK217型式併行期の須恵器が出土した。上記住居2と建物3との切り合い関係から、古墳時代後期のTK209併行期の内に、名和飛田集落内で竪穴住居から掘立柱建物に変わるものが現れ、続く同TK217型式併行期（7世紀第1四半期頃）には、竪穴住居は検出されておらず、掘立柱建物が主流となると理解できる。西伯耆においても住居形態の移行時期を把握できる好資料を得られたことになる。一般的に、集落における住居は、古墳時代の後期に、竪穴住居から掘立柱建物に移行すると考えられている。さらに掘立柱建物の構築に際しては、伝統的な竪穴住居とは異なる建築部材や建築技術を要することから、住居形態の移行は、政治的にも経済的にも優れた単位集団や集落に限

って始まったとされ、その時期差は単位集団・集落間の格差の表れとして理解されている（小笠原1979、山田1981など）。

山陰地方では、島根県安来平野・松江平野で古墳時代集落の調査件数が多く、集落の検討も進展している。その好例には、島根県安来市山ノ神遺跡・目廻遺跡・徳見津遺跡・五反田遺跡・石田遺跡・渋山東遺跡などがある。山ノ神遺跡・目廻遺跡・徳見津遺跡・五反田遺跡は、鉄を生産していた集団の集落である。これらの遺跡は丘陵と谷を挟んで隣接し、集落の移動が把握できる遺跡群である。ここでは、6世紀第四半期（陶器編年TK43型式～TK209型式併行期）に、竪穴住居と掘立柱建物が見られるが、それから徐々に移行が進行し、7世紀第2四半期（飛鳥期）の集落では、掘立柱建物が住居の主流となっていたと復元されている（椿1998）。石田遺跡では大谷編年の出雲5期の段階に、竪穴住居が廃され掘立柱建物のみで構成される集落へ転換したようである（池淵1998）。渋山池遺跡では、出雲4期の段階に、斜面で加工段を伴う掘立柱建物による集落構成がみられ、その移行はやや早かったようである（椿・林1997）。名和飛田遺跡周辺での移行時期を比較できる資料はまだ認められず、今後の調査の進展を待たなければならないが、島根県東部での移行時期とほぼ同時期に進行したといえる。

### 3. 外周柱穴列を伴う掘立柱建物4について

古墳時代から古代の大型掘立柱建物に関する研究には、宮本長二郎氏（宮本1991）や梅本康弘氏（梅本1997）をはじめ多数ある。外周柱穴列を備える建物を、四面庇付建物として注目した研究には、山本忠尚氏（山本2004）、青柳泰介氏（青柳2003）らの研究がある。これらを参照し、掘立柱建物4に若干の考察を加えたい。掘立柱建物4の外周柱穴列について、検出状況から得られた諸特徴を若干補足すると、

現況ではほぼ平坦な箇所に見えるが、微地形では等高線に平行した東西棟である。

身舎の柱穴に比べ、外周する柱穴はやや小型で浅いものが多い。

外周する柱穴は、身舎のほぼ柱間に位置する。

身舎の南東隅に当る箇所には柱がない。

攪乱内も完掘し精査したが、東面のP4 - P5間には、柱およびその痕跡は見出せなかった。ここに柱がなく柱間が広がった可能性もある。

身舎の柱間距離は梁行が平均1.26m、桁行が平均1.22mであるのに対し、外周柱穴列の出は南面が1.6m、東面が1.36m、北面が1.32mである。外周柱穴列を庇とすれば、いずれも広庇といえる。

同様に、外周柱穴列を庇とするならば、南庇の出は、ほかの庇に比べ広い。

などがあげられる。諸氏の研究から、外周柱穴列を有する建物の類例は表25と図167の通りである。外周柱穴列の出に差があることは、庇と軒支柱やさしかけ庇、あるいは縁などの構造的な差によるのかもしれない。南面柱穴列の出が広いことは、掘立柱建物3と同じ傾向といえる。また、青柳氏の研究では、古墳時代後期の四面庇付建物は、古墳時代中期までのものは平面プラン正方形のものが主流で、古墳時代後期には平面プラン長方形のものが大多数を占めるようである。本遺跡の掘立柱建物4は、残存部分で床面積を求めると最小値でも57.7㎡前後と求められる。当然、身舎が長方形プランであったとすれば、これ以上となろう。掘立柱建物4も大型建物の範疇に含められるだろ

う。四面庇付掘立柱建物を有する古墳時代の集落で、その構造が把握できる例では、奈良県御所市の南郷遺跡群、群馬県三ツ寺 遺跡など多数ある。山陰地方では兵庫県山東町柿坪遺跡がある。また、集落構造や遺構の全容は不明ながら、外周柱穴列を伴う建物を有する遺跡には、京都府精華町森垣外遺跡や島根県出雲市三田谷1遺跡などが近い。

< 柿坪遺跡 > 柿坪遺跡は古墳時代但馬最大の集落である。遺跡は与布土川によって形成され段丘化した扇状地に立地する。居住域は東西約340mの範囲に遺構群が広がる。遺構群は、ほぼ古墳時代初頭から7世紀末のものである。検出された遺構には竪穴住居約120棟・掘立柱建物34棟からなる。居住域内は溝や自然流路によって、東・中・西区に区画され、四面庇付建物を含む主要建物群は東区に位置する。主要建物群は、四面庇付建物・孫庇を備えた四面庇付建物・屋内棟持柱を備えた側柱建物で構成される。調査者は、居館や祭殿など大型掘立柱建物群からなる祭場域を形成して

表25 大型四面庇付掘立柱建物の諸例（青柳2003に一部改）

	遺跡名	府県名	遺構名	時期	形式	柱間数		規模 (m)		面積 (㎡)	位置	備考	文献
						庇	身舎	庇	身舎				
1	中海道	京都府	S B32110	前期	A-1	4×4	2×2	8.6×7.7	5.3×5.0	66.22	集落縁辺部		1
2	中溝・深町	群馬県	1号掘立柱建物	前期	A-1	4×4	2×2	8×8	4.8×4.5	64	集落縁辺①		2
3	城之越	三重県	A地区SB1	中期	A-1	5×4	2×2	13.6×12.0	8.4×6.2	163.2	集落縁辺②	前身建物SB1'あり	3
4	城之越	三重県	A地区SB2	中期	A-1	4×4	2×2	11.3×10.3	5.8×5.0	116.39	集落縁辺②		3
5	城之越	三重県	B地区SB1	中期	A-1	5×4	2×2	12.5×11.6	7.5×6.8	145	集落縁辺②		4
6	城之越	三重県	B地区SB2	中期	A-1	5×4	2×2	13.7×12.5	8.2×7.1	171.25	集落縁辺②		4
7	南郷安田	奈良県	S B01	中期	A-1	4×4	2×2	12.5×11.5	7×7	263.5	集落縁辺②	孫庇?、6×6、17×15.5m	5
8	和邇	奈良県	掘立柱建物01	中期	A-1	6×6	2×2	13.3×12.9	8.1×7.7	171.57	集落縁辺③		6
9	柿坪	兵庫県	S B5	中期	B	6×6	3×2	15.4×13.1	9.4×8.7	201.74	居館?		7
10	柿坪	兵庫県	S B19	中期	B	5×4	3×2	10.7×10.3	5.6×5.4	110.21	居館?	孫庇	7
11	三ツ寺 I	群馬県	1号掘立柱建物	中期	A-2	8×8	3×3	13.7×11.78	10.1×8.42	189	居館		8
12	原之城	群馬県	第3号掘立柱建物	後期	A-2	7×5	2×2?	10.5×8.9	7×5?	93.45	居館	切り合い関係あり	9
13	原之城	群馬県	第4号掘立柱建物	後期	A-1	5×4?	2×2?	8.0×8.0?	6.1×5.4?	64?	居館		9
14	上之宮	奈良県	S B06	後期	B	6×5	4×3	13.6×11.4	9.35×6.5	155.04	居館	屋内棟持ち柱、S B07に切られる	10
15	上之宮	奈良県	S B07	後期	B	7×6	5×4	12.85×11.1	8.95×7.1	142.64	居館	屋内棟持ち柱	10
16	中山	奈良県	S B01	後期	B	7×6	5×3	22.5×18.5	19×14	416.25	集落縁辺部	孫庇、屋内棟持柱	10
17	平尾山	奈良県	第I区掘立柱建物	後期	B	6×5	4×3	12.93×10.44	8.35×5.88	134.99	集落縁辺③		11

※1 形式は、青柳分類による。以下の通りである。

A-1類=身舎の柱間間数が各辺同数のもので、正方形プランのもの  
 A-2類=身舎の柱間間数が各辺同数のもので、長方形プランのもの  
 B類=身舎の柱間間数が各辺同数にならないもの。

※3 位置の細分類は青柳分類により、以下の通りである。

①居館近接型、②導水施設近接型、③古墳近接型

文献

- 1 (財)向日市埋蔵文化財センターほか 「中海道遺跡-第32次発掘調査概要-」 『向日市埋蔵文化財調査報告書』第44集 1997年
- 2 群馬県新田町教育委員会 『新田東部遺跡群』 1995年
- 3 上野市教育委員会ほか 「城之越遺跡(2次)発掘調査報告」 『上野市文化財調査報告』51 1998年
- 4 三重県埋蔵文化財センター 「城之越遺跡」 『三重県埋蔵文化財調査報告99-3』 1992年
- 5 奈良県立橿原考古学研究所 「井戸遺跡・南郷安田遺跡」 『奈良県遺跡調査概報1995年度』 1996年
- 6 奈良県立橿原考古学研究所 「和邇遺跡第14・15次調査」 『奈良県遺跡調査概報2002年度』 2003年
- 7 兵庫県埋蔵文化財調査事務所 「柿坪遺跡」 『平成11年度 年報』 2000年
- 8 群馬県教育委員会ほか 「三ツ寺 I 遺跡」 『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集 1988年
- 9 伊勢崎市教育委員会 『原之城遺跡発掘調査報告書』 1988年
- 10 桜井市教育委員会 『阿部丘陵遺跡群』 1989年
- 11 埋蔵文化財天理教調査団 「平尾山遺跡発掘調査報告書調査報告-1984.4~1984.7調査-」 『考古学調査研究中間報告』15 1989年

いたと想定している。また、近隣に所在する和田山町茶すり山古墳は、径86mの円墳である。近畿地方でも最大規模の墳丘で、豊富な遺物を出土した古墳時代中期の古墳である。柿坪遺跡の大型建物群とほぼ同時期のもので、両者の関係が注目される（吉識ほか2000・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2004）。

<三田谷 遺跡> 建物の全容と詳細な時期が不明であるが、島根県出雲市三田谷 遺跡のS B 16も同様の建物である。三田谷遺跡は、神部川が出雲平野に流れ出る辺りの丘陵地帯とその谷間に立地する。遺構の中心は側柱建物と倉庫と考えられる総柱建物である。建物群は4つの単位集団が抽出でき、6世紀後半以降、7世紀以降、7世紀末以降の3時期の変遷が復元されている。S B 16自体の時期は不明確であるが、その位置などから7世紀代の建物群に含まれ、谷の奥に位置する。S B 16を含む建物群と重複するように、下の時期の湧水坑や墨書土器・斎串などの祭祀具が出土している。調査者は、その開始時期は不明ながら、この谷の奥が湧水を用いた祭祀場であり、S B 16が神殿であったと想定している。S B 16の規模は、外周柱穴列の梁行は4間、桁行1間以上、身舎の梁行3間、桁行は調査地外に外れるため不明である。外周柱穴列と身舎の柱とは対応しない。調査者はこの外周柱穴列を縁束である可能性も示している（熱田編2000）。

このような諸例で四面庇付建物を含む外周柱穴列を伴う建物は、濠や柵で囲繞され、導水施設や祭祀遺構を伴う例が多い。そのため、一般の側柱建物や倉庫と考えられる総柱建物よりも格が高い建物であると評価されている。山本氏らの研究により梁行3間四面庇付き建物は、後の官衙や宮における正殿に用いられたことが説かれている（山本2004）。換言すれば、四面に外周柱穴列を伴う大型建物をもつ集落は、それをもたない一般の集落に比べ、格差を有する有力な集落であるといえる。以上のことを踏まえ、本例をみると、今回の調査では、濠や柵などの囲繞施設や、掘立柱建物4に伴う祭祀遺物や、祭祀遺構を見出せず、祭事・政事を行う空間の存在は見出せない。祭殿であると評価するには、今後の調査の進展を待たなければならない。同様に、本遺跡の掘立柱建物4は、今調査地においては、辰巳氏が説くような諸条件（注1）を満たしておらず、豪族居館とは断定できない。しかしながら、掘立柱建物4は、山陰地方での同時期の集落遺跡をみると、その規模・構造には明らかに格差が認められる。豪族層の屋敷であった可能性は高い。

#### 4．古墳時代後期における名和飛田遺跡周辺の景観について

最後に名和飛田遺跡周辺の古墳時代後期の景観を考えたい。本遺跡の広がりを見ると、本遺跡の北方、東谷川右岸には坪田遺跡がある。平成11年度名和町教育委員会調査地では、花粉分析の結果から、古墳時代後期に確実に水田耕作が行われていたとされる（影山2002）。東谷川沿いの現坪田集落付近には水田が広がっていたと考えられる。また、名和飛田遺跡の掘立柱建物4を、豪族層の住居や祭殿と評価することが許されるならば、諸研究（注2）にあるように、この大型建物とそれを有する集落に相関する古墳の存在が推測される。しかしながら、本遺跡周辺では、古墳時代中期のハンボ塚古墳以降には、首長墳と評価できるような古墳はいまだ見出されていない。古墳の発掘調査例は少なく、既往の石室調査例（山陰考古学研究集会1996）を見た限りでも、古墳時代後期に突出した石室規模や構造の古墳は見出せない。地理的に近いという点であげるならば、坪田遺跡西方の台地上縁辺部に坪田古墳群がある。発掘調査は行われておらず、詳細はわからないが、分布調査から、残存直径5mから26mの円墳7基が地形に沿って並ぶ。その分布と墳丘のあり方から、

古墳時代後期の古墳群と想定されている。径約26mの第6号墳が、名和町域で最大の墳丘であり（名和町誌編纂委員会1978）、注目できようか。また西側の門前丘陵の先端部にも古墳がいくつか散在する（富長編1981）。このような周辺の古墳のあり方をみると、名和飛田遺跡に居住した集団を豪族層と認めても、それほど大きな豪族ではなかったようにもみえる。

今回の報告では、より広い地域間の同時期の集落と比較検討することはできなかった。旧汗入郡域での首長と集落の系譜を検討することは資料が少ない現状では難しい。今後の課題としたい。

（日置 智）

検出した遺構群の評価に際して、兵庫県芦屋市教育委員会の森岡秀人氏に、多くのご教示を賜りました。末筆ではありますが、深く感謝いたします。

注<sup>1</sup> 辰巳氏は、「広大な方形の屋敷地が、濠と柵で圍繞され、（中略）、一方が首長によるマツリゴト（祭事・政事）の空間であり、他方が、首長と一族の居住や倉庫・工房など、首長としての日常的な営みの空間と認識される（中略）屋敷地の二分構造を、それぞれ「ハレの空間」と「ケの空間」と呼称し、とりわけ前者を明確に指摘される屋敷地こそを、いわゆる豪族居館と認識すべきである。」と説かれる。（辰巳1990・2003など）

注<sup>2</sup> 阿部義平1991「豪族居館研究と課題」『季刊考古学36 特集古代の豪族居館』雄山閣所収など

#### 【引用・参考文献】

青柳泰介2003「大型四面庇付き掘立柱建物について」『同志社大学考古学シリーズ 考古学に学ぶ（ ）考古学研究室開設五十周年記念』同志社大学考古学シリーズ刊行会

熱田貴保編2000『三田谷 遺跡（vol. 2）』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 建設省中国地方建設局 出雲工事事務所・島根県教育委員会

池淵俊一編1998『石田遺跡 - 一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書15 - 』島根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所

梅本康広1997「考察 - 遺構・遺物の評価と問題点」『中海道遺跡 - 第32次発掘調査概要 - 向日市埋蔵文化財調査報告書第44集』財団法人向日市埋蔵文化財センター

小笠原好彦1979「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』第25巻第4号 考古学研究会

影山和雅2002『坪田遺跡発掘調査報告書』一般県道旧奈和西坪線地方特定道路整備事業による県道付替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 名和町文化財調査報告書第29集 名和町教育委員会

小池 寛・松尾史子2000『森垣外遺跡第3次』京都府遺跡調査概報第91冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

辰巳和弘2003「古墳時代の居館と大型建物」『日本考古学協会2003年滋賀大会資料集』日本考古学協会2003年滋賀大会実行委員会

椿 真治1998『山ノ神遺跡 五反田遺跡』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書16 島根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所

椿 真治・林 健亮編1997『洪山池遺跡・原ノ前遺跡』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区 島根県教育委員会

富長源一郎編1981「荒田遺跡」『名和遺跡群発掘調査報告書』名和町教育委員会

中原 斉1996「伯耆西部の横穴式石室」『第24回山陰考古学研究集会 山陰の横穴式石室 - 地域性と編年の再検討 - 』山陰考古学研究集会

## 第6章 特論

名和町誌編纂委員会1978『名和町誌』

西川徹ほか編2004『茶畑遺跡群 茶畑第1遺跡・押平尾無遺跡・古御堂笹尾山遺跡・古御堂新林遺跡』鳥取県教育文化財団  
調査報告書93 財団法人鳥取県教育文化財団

原田雅彦他編1978『由良遺跡発掘調査報告書 県立由良育英高等学校敷地造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査』鳥取県  
東伯郡大栄町教育委員会

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2004『兵庫県埋蔵文化財情報 ひょうごの遺跡』52号

松井和幸ほか1986『大宮遺跡発掘調査報告書 兼代地区』広島県埋蔵文化財センター調査報告書第51集 財団法人広島県  
埋蔵文化財センター

宮本長二郎1991「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会

山中敏史編2003『古代の官衙遺跡 遺構編』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

山本忠尚2004「祭殿から内裏正殿へ(上) - 梁間三間四面庇付建物の意義 - 」『古代文化』56 - 5 財団法人古代学協会

山本忠尚2004「祭殿から内裏正殿へ(下) - 梁間三間四面庇付建物の意義 - 」『古代文化』56 - 6 財団法人古代学協会

芳賀章内編1991「特集 古代の豪族居館」『季刊考古学』第36号雄山閣

吉識雅仁ほか2000「柿坪遺跡」『平成11年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

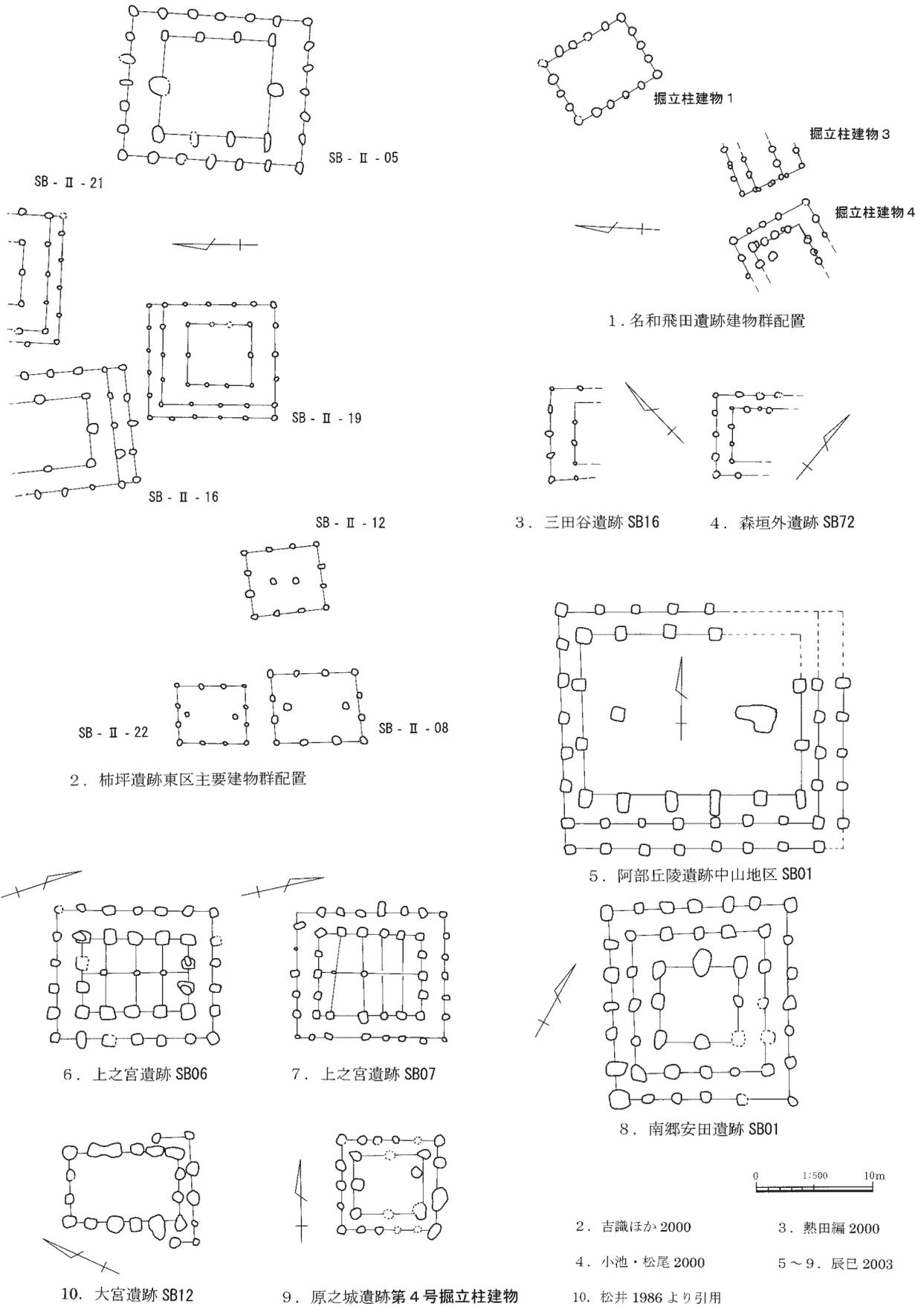


図167 外周柱穴列を伴う大型建物の諸例